

學藝叢書

9

# 地理學叢話

理學博士神保小虎講述

博文館

版藏

東京



地理學叢話

明倫  
41 6 24  
內交

## 凡 例

- 一 本書は學藝叢話の第九編にして、理學博士神保小虎君の論說見聞等を集録したるものとす。
- 一 本書中の記事は、主として博士が曾て太陽中學世界等のために物せられしものなるが、今回之を編するに當り要を加へ、繁を省き、且つ題を改めたるものあり、即ち外國語速成術を速成術としたるが如し。
- 一 本書編纂の方法は、先づ外國語の修鍊に始まり、内國より外國に進むべき順序としたり、何れも博士の指導に依るものとす。
- 一 ジャバ、ボル子才等は南洋の寶庫たり、而も我國人のこゝに着目するもの少なきは甚だ遺憾とする所なり、讀者は充分の研

二  
究を此方面に試みられん事を望む。  
一  
また本書地理學叢話と題すれども、旅行見聞に關する記事頗る多ければ、避暑の友として之を讀むも得る所尠少ならざるべし。  
一  
卷中挿入の寫眞は何れも博士が旅行中得られたるもの、蠻王の名刺の如き、殊に珍とするに足るべし。

明治四十一年五月校了の日

木村小舟記

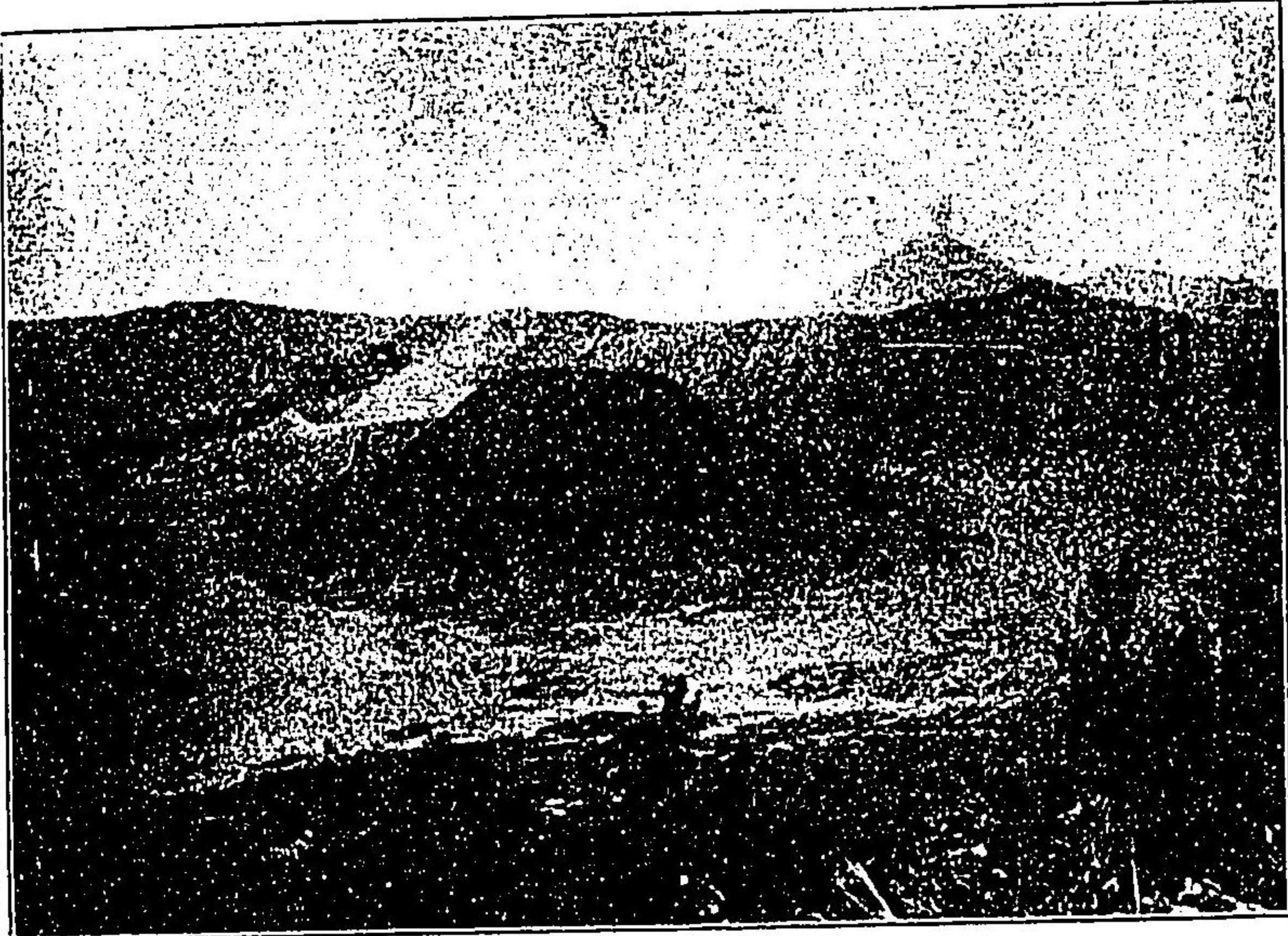
# 地理學叢話目次

(1) 次 目

---

外國語速通術	一
地理學者にアイヌ語の勧め	一六
ローマ字變革論	二五
探檢旅行者の經驗	三四
二日間に箱根の遠足	五五
信濃旅行の雜記	七二
支那巡りの俗話	九三
ボルネオ外二島巡見雜話	一三九

火 山 と 大 樹



ジャバ島東部のテングル火山の火口内にある踏小火山の圓錐にして其一は蒸気を噴き居れり、後方遙に美しき火山の噴汽を望む。



ジャバ島の大樹にして枝より根を垂れたる者。

目 次 (2)

目 次 終

ポルネオ島蠻王の家……………一九五

ジャバ島の話……………二一八

装常の子男島バヂ



頭を布にて包み、其結び餘りを兩方に垂る、腰に美しき布を纏ふ、帯の後方(脇に非ず)に脇差しを挿す、寫眞には特に其柄の部分に右方の男の肩の邊に露せり。

刺名の王と嬢王

南洋ホルネオ島のオランダ領に於ける土人の王の璽、冠及び腕輪に黄金の色輝けり。



札手の玉の人士の方地イテリ島オネルホ  
 び及字のり殿ケンラオリお形の冠に上  
 ぶあし記てに字文アピラ





# 地理學叢話

理學博士 神保小虎 著

## 外國語速通術

術 通 速 語 國 外

(1)

座して書を披く所の地理學者は諸國の學者が探檢の報告を見るが爲め種々の國語を解するの要あり又單に地圖を用ゆるにも多少の語學なければ地名の同異を辨別すること難し、又諸國の書を類別して陳列する書籍館吏は多少の語學者たる事肝要也、特に諸國を巡回して自から觀察を試る人は其地の土語を習ひて行くの利あること、又通辯を用ふるの不便なること余屢々之れを説けり、然るに外國語は極めて習ひ得がたと信ずるものあり、外國語を發音す

るは芝居役者の假聲の如しと忌む者あり、然れども決して人の信ずる如く極めて困難なる者に非ず、猥に賤しむべき者に非ず、限りなく長日月を要するものに非ず、余は已むを得ず諸國の語に接し少しく語學速通術の經驗あり、余が見る所にては文典の素讀固より味ひ無く文典の暗記は勞して功なく、古き詩文の研究は専門家の爲すべきものなり、筆を以て生活する者、口を以て交際する者は我知らず唯日用を辯じ。又た簡易なる文體の書籍を讀んで外國の學者と對せんとする者は決して右の如き迂を爲すなかれ、我に法あり即ち次の如く主として實地練習を以て語學を修る者なり。

第一膽力と落つきと獨立心、文法は急に學ぶべき者に非ず、云ひ習らはせは少くとも十箇年の修業を要すべし、強て急に之を學ばんとするは愚者の徒勞のみ自然に心に染み込んで知らず識らず記憶するを待つに如かず。

(文法を暗記し得るは英語等にて出來得るもラテン、フィンランドの如きは

到底出來ず)。

「言ひ習はせ」とは文法外に於ける言葉の定めにして例令は「我有一個孩子」は日本流に譯せば「私は子が一人あります」となりイギリス流に云へば「我は一の小兒を持つ」となりロシア流に云へば「我には一の小兒」と短く言ふなり此等の習慣は諸國固有なる所ありて之を誤れば傍人の笑となり之を皆學び得るには長日月を要す。

初來の渡航者不熟の語を囁る時は(風俗等に多少の注意あれども)多く先方の顔を見つめて聲明かに物を言ふべく、決して耻しがりの處女を眞似て半文中絶の「曷後法」を用ゆべからず、調子悪くして先方が顔をしかめるに驚かず言ひ損ひを笑はれて耻と思ふべからず意義通ぜずして怒られて震へるべからず。

笑ふものあらば特に嚴格に對すれば笑ひを止むるものなり、怒る者は「暫く

待ち給へ實は何んと云つたら善いのやら今少こし待ち給へ」杯の敷衍にて之を押し留ども得るものなり。

電信の文は簡にして意善く通ず、三體詩の白文も漢學を心得たる日本人には多少は解し得る者なり、初學者此事を忘れず善く實地に應用すれば僅かなる練習にて外國語を用ひ得ることあり、文法は言語興りて後の物なるべく言語の始めは文法極めて少きに相違なし重要なる語を明かに發音し、一語一語順に先方の耳に入れて意を解せしむれば必ずしも始めより眞の文法に拘はるの必要なし Deno-station. where? の二語にて慥かに will you be kind enough to show me the way to the Deno-station? の繁文を省略し得て外國人は其言の畧なるを尤めず、皆豫想外に了解し得て却て長口上の容易に段落に至らざるの苦しみを感ぜざるべし、然れども短句には一語をも落すべからず善く膽を据へて靜に言ふべし、始めより客體を重んじ美辭を撰ぶが如きは極めて拙にして

外國語にて物を云ふ時は、文法の笑を受けざる人と雖ども、言廻しの外國風なるを脱せずして笑はるゝは毎度の事なれば、注意深くして小心に過ぐるは愚の至りなり。

凡て何事を爲すにも獨立心は肝要にして教師に就けば自然に卒業すと思ふべからず、人の助けを假れば心安しと思ふべからず、語學に始終教師を用ゆるは唯發音と作文に必要なのみ。

譯讀の如きは少々の手ほどきと漢學の力にて大抵の難を排すべし、凡そ書を讀まんとせば一度字引なしに素讀すべし、然らば度々出る and, but の如き語の意味は大抵推しはかり得るなり、一遍熟考の後始めて字引を取るも字毎に一々之を引くの要は更に無し（漢字の章句法を心得たる者は大分推察力に富む者なり）。

又た字引は大なる者を善とす、如何に變化したる語も大抵見出し得て苦しむ

を感じしむる事なし、小さき字引に無き變體の語は多く to be, to have の如き諸國にて不規則なる變化を示す語なり、是れは大抵文典の動詞の部に潜伏する者なれば字引の内のみならず爰をも搜索すべし。

字引を引きて指頭の摩れる事をも厭はず一文中の語を残らず知らば其後は程善く文法書を参考して「反り點」を考へるべし（文法を残らず暗記せずとも短文の全意は推察にて解かるゝ者なり、又比較讀みと稱し兩語對譯の書を讀んで自から文法發見の練習を爲すこと必要なり）。

余は決して語學者に暗記を勧めざる者にして獨り異人の中に入りて談話し、獨り字書を取りて（文法書をも開き）讀書を練習し、知らず識らず語を記憶するの法を尊ぶ者なり、但し音變の習慣を以て言葉連續の順を自から記憶するに至る事肝要なりとす。

第二物眞似と芝居掛り、壯士「鞭聲肅々」を吟じて後に長唄を語れば人皆笑

ふべし、蓋し其音聲の困難なるに因る、外國語も亦然り、京都人がドイツ語を話すは鹿兒島人がデンマルク語を話すが如く、大に聞く人の耳を悩ましむべし、音に不快を感じるのみならず意義通じ難きことあり、ドイツ（特に其東北部）の語は烈しく、支那語はピアノの上を飛びくに押すが如く一々聲の上下に注意し、ロシア語は多くの母音短きを以て長々と延びたる語を一息にスラリと發し、スウエーデン語は軟らかく殊に力を入れざる母音に於て調子を上ぐるを以てお嬢様の如し、今一々之を眞似る時は眞の役者も其煩に堪へざれども之を學ばずんば屢々意義不通の恐れあり。

唯に音聲のみならず心組みも亦肝要なりヤソ教の國に於ては假りにヤソとなりて流行を追ひ、支那に在ては金を説き、日本にては廉直と丁寧を先きにし、ヨーロッパに行けば拜金と親密を先きにするは已むを得ざるの交際法なり、

「恐れ入りますが其れを頂戴」の語はヨーロッパに行けば、「汝其れを我に與

へる様な深切心を持たんとするか」と云はずんば意義を譯し難し、爰に至て我日本の臣民と雖も心組みと音聲と共に一時衷心に違はざるべからず。第三常用語、「難有」「御免」「ドーゾ」の如き禮義の語を始めとして凡そ三百程の單語を知れば大抵談話は爲し得る者なり。「帽子」の名を忘るれば「頭上の掩ひ」にて通じ「辮髮」を忘れし時は「頭上の尾」にて意は通ず彼れ是れ巧に流用すれば單語の数は少々にて足れりとす、營業の語學教師卒業の期を遅くせんが爲め何の撰ぶ所なく空に「ペンシル、鉛筆、ペンナイフ筆切り小刀」の如き暗記を以て生徒の時日を浪費せしむるは常のことなり初學者注意すべきなり又常用語の缺くべからざる者は小き單語篇又は袖珍字書の類あり寫し貯ふべし先づ談話の稽古には、文典一閱（暗記せずして）の上特に言葉の排列法に注意し置き其上にて代名詞、數詞、前置詞、接續詞、（此等は各國共其數極めて少し）を皆記憶し、傍ら極めて少々の形容詞、動詞、副詞、名詞等を記憶す

べし、凡て皆務めて覚えんとすれば却つて覚えざる者なり手當り次第に會話等を讀で口癖の如く覺えるべし、總て語を記憶する法は勸工場の巡回に因つて賣品の功能等に「示物授業」の自習を爲すも可なり、之を忘すれざる様になすは土人に向つて之を試用するに在り、一度試用して功を奏したる言葉は多く忘れざる者なり。

又語を記憶するには其正音のみにて記憶すべからず、其語の内の力の入れ所と、調子の變遷をも同時に學ばざるべからず、此事は初學者の最も誤りをなす所にして甚しきは支那語を習て四聲に頓着せざる人あり宜しく注意すべしイギリス語の「も言ひ方にて種々の意となり日本の「チャマーソー」も言ひ方にて怒氣を含み又喜びを表することあり。

第四語學進歩の三段、始め僅か一二の單語を叫ぶ時は妙々と賞賛せられ、少しく進んで續きある文句を言へば感心と稱せられ、後少しく長文を臆面なく

囁るに至つて、汝何んぞ此地に滞留して斯の如く文法外れの妄言を爲すや」と評せらる、爰に至つて語學稍々進歩したる者と知るべし。又初對面の時に我言の通ぜざる相手ありて、第三對面頃に善く我が語を解するとも決して我が進歩には非ずと知るべし是れは先方が我に對する聞き上手となりし證據なり。

第五、土人を教師に使用する事、土人教師（開化人と蠻人の別なく）は（多く語學速通法の何たるを知らざるを以て）決して之れに依頼して學ぶべきものにあらずして我れ進んで之れを用ゆるの心得なかるべからず、主として之れを發音の練習と作文の稽古に用ひ、又自から單語を集むるの練習に用ゆべし（譬へば手と云ふ語を得んと欲して手に指をさし土人に向つて是れは何かと問へば手の平、毛だらけな手、黒い手など教へらるゝ事ありて思ふ様に行かず適語を求むるには随分困難なり是れも練習の一なるべし）。

第六、自習の法、第一讀書を盛んにし特に音讀を以て口調を覺え自然に文法に馴るべく文法を讀む時は第一 Syntax に注意すべし語尾の變化等を一々知らざるとも前後の關係にて意を推察し得ることあり、又之れを解し難き度に文法書を開けば可なり前に述べたる如く兩語對譯の書を讀むも可なり作文は進歩容易ならずして自習には好ましからず、文章の暗記の如きは學校教育の事のみ。

第七、謂ゆる言語獨學書と通信語學の書、ヨーロッパ文學にて音を記したる獨學書と雖も發音は決して是れのみにて自修すべからず、必ず土人教師を要するものなり、又譯讀の練習も之に因れば随分緩漫なるが如き者多し余は決して通信語學の書を好まず唯已むを得ざる時は之を開くこともあるべし。第八、平常の心得、汽車、汽船、見世物小屋、料理店の別なく外國人に逢へば直々語を交へて質問百出遂に煩悶に至らしむるものはドイツ人の得意とす

る所なり、又同國にて往來に外國人を呼び止めて古き郵券を求むる學校兒童あり宜しく捕へて數分間唇を動かすべきもドイツ以外の他國人に向ては斯の如く人に接すること難し、然れども群集の内に於て赤髯人が「日本帝國萬歲」など、呼ぶ時は随分愛嬌ありて人を引き寄する一方便なり或る人メキシコに行きて人に冷遇せられし時 Bonita vista (好き景色) の二字を叫びし時急に人々集りて厚遇せしと云ふ、又外人に物を贈るに贈呈の二字を其國語にて記せば大層感じ善き者なり是れも注意すべき事なり、今日の學者には三大開化國イギリス、フランス、ドイツの語は言ふに及ばずして隣國のロシア、支那等の語學も入用なり、特に漫遊者の如きは外國に行きて各國英語にて充分用を辨すべしと信ずる勿れ、余が旅行中最も恐るゝものは下女、巡查、小供并びに百姓にして途上殆んど毎日之れに質問を交へざるべからずして皆其本國の語のみを解する無教育人なり。

半日日本語を用て口末泡を噴けば午後は口の形純然たる日本風になりて國語を語るに困難なり、海外滞在中は成るべく同國人と多言すべからず、又暇あるときは左の如き難語を練習して口を軽くすべし。

(日本) 隣の客は善く柿をくふ客だ。

(英吉利) Peter piper picked a peck of pickled pepper.

(ドイツ) Fischer's Frit frist fische Fische. 又た長きロシア語の Wissokoprew os-Chaditelstwe (ドイツ流に綴りたり其意義は英の Excellence に同じ) などを繰り返し日本の「法性寺入道前の關白太政大臣と呼び捨てにしたら腹を立つたから今度から法性寺入道前の關白太政大臣様と言ふのう」の類を一息にて數回素讀するも舌の練習に妙なり。

第九、初學者の談話に最大困難を感じるは人を訪問したる時と道を問ふときにおいて(買ひ物、汽車の切符などには言葉少くして足るを以て困難誠に少

し。是れは左の如く爲すべし。

訪問の時は取次ぎに向て、「汝は何々の外國語を解するや」など、哀れなる問ひを出さず先づ土語を以て、「先生在宅か」と問ひ、「然」と「否」の如き解り易き答を出さざる間は順に左の如き問を多く出し其内は大抵用を辨するなり。

「今此町に御出でか」「御旅行中か」「直きに御歸宅か」「午前は遇へるか」「午後か」「一時頃か」「二時頃か」……………

唯氣根さへ善ければ大抵差支なし。

道を問ふ時は先づ距離と方向を問ひ、口まかせに「眞直に行くのか」「少し行きて右に曲るか」「そんなら左の方か」などと種々に問ひて少し進み復た行き合ふ人に尋ねべし、此方は何遍尋ねるとも先方は皆新ら手なれば氣の毒なることなし。

第十、携帯便利の會話と字書、或る字書は小にして之をかくしに入るべく、又ドイツには諸國旅行中必用の語を集めたる字引あり。(Meyer's sprachfuhrer) て、「料理屋」と引けば「酒を持てこい」の連語迄も網羅しありて而して語數決して多きに過ぎず又た終りに文法數枚を附せり故に此書を求め、又小字典と案内記とを得て兼て養ひたる獨立心を以て諸國を横行する時は樂み極りなしと云ふべし。

第十一、四面楚歌の聲と等しきは語學未熟の時異人群中の苦しみ、先方の言ふ所は多く耳に入らず我言ふ所は容易に通ぜずと雖も數回此盤根錯節を切り開く時は存外苦しみの少きを覺ゆ、蓋し如何なる多辯の異人すら尙其問ひ掛る事は略ぼ十分時間の内は同一轍に出るなり、「どうして言葉を習ひしや」「此國の食事はまづきや」「何所を通して此地に來りしや」「日本にも鐵道ありや學校ありや犬ありや雀ありや」の類にして之れに對するの答も皆版にて押したる



が如くにして可なり、若し亦面倒なる問を避けんとせば此方よりして多問を掛けて先方の鋒先を外すべし。

先づ實用上并に讀書用の語學術は斯の如し初學者決して暗記を爲す勿れ、教師のみに便る勿れ、困難なる詩文を讀んで語學の稽古と信ずる勿れ、然れども法律家、哲學家の如く我専門の書籍に文辭の高尙にして特に困難なるを手にする人は眞に文學として語を學ぶの要あり。

### 地理學者にアイヌ語學の勧め

我文科大學の學科に改正ありてアイヌ語（北海道土人并に南カラフトノ土人の語は博言學科第三年生の隨意科となれり、是れ近來の一進歩にして尙ほ既に博言學々生一名に二回の北海道出張を命ぜられ大學は此語の研究に注意することを明かにせり、之より先き余は自費を以て月給旅費并に食費を出し前後

合せて五ヶ月程の間アイヌを養ひ置き自家の研究と文科大學々生の參考に供したり、余は原と北海道廳地質探究の主任にして四年間本道を経歴し、多くのアイヌに接し、遂に其語を學びて談話し得るに至り、此語の重要なことを覺とりたるを以て、聊か其世間に流布することを求め、大學も亦文科學生の隨意科として之を見るに至れり、然れども世界尙ほ其要ある所を詳にせざるものあるが如し、故に爰に之を述べんとす（東京地學協會報告二十八年一月の分を參考せよ）

抑も語學なるものは一種の價值ありて自國語として之を語る人の風俗習慣并に禮式、思想、開化の度其他宗教に對する種々の關係を示すことありて人類學上の研究には缺くべからざるものにして、語學を學ぶは決して異様の發音を學び奇妙なる文體を究むるのみに止らずして、他に大なる目的の在りて存するなり。

日本地理學者を以て世に立つ者は、我日本の四分の一なる北海道を知らずして止むは不可なり、之を知らんと欲せば地圖を用ひざるべからず、而て北海道の地圖を解し地名の同異を辨ずるは多少アイヌ語を知らざるべからず。凡て地名を見て其意を解することなくして空に記憶せんとするは勞多くして益少くまた興味を感じることなし、然るに「アイヌ」語を知らざる者は大抵皆アイヌ語より成れる北海道地名を無味なる者として記憶せざるべからざるが故に地名を寫し又之を發音する毎に誤りを生じ易きは實に免れざることなり、全く地名を解し得るに至らざるも語尾を爲す所の山、川、村等の普通名詞并に上、中、下、新、古等の冠詞を知る時は尙ほ多少の利益あり「砂川」なる地名に「上砂川」と「下砂川」を分ちあるも是れ皆畧同じ位置に當ることを認むべく、全く此三者を取て相異り著るしく相距れる地名と誤るの憂なかるべし、更に進んで「アイヌ」語の地名を充分に解し得る時は地名に因て

其所の物産、地勢、故事、歴史等を推すことを得べし、地理學なるものは單に天然物に對する事實を究むるのみに非ずして、多少語學上并に歴史上の事實をも含まざるべからず、又或時は唯地名に因て既往の變遷を知ることあり、(地勢の變化産物の増減、人事の沿革等) 今地名の種類を左に畧述して地名の價值を論じ地名の意を解し得る者の利益如何なる點にあるやを示さん。

#### 世界地名類別の表 エグリ氏地名論

##### (第一) 天然名稱

其最下級に屬する者は單に普通名詞より成る者にして其例はサハラ(單に沙漠の義) ポントス(海)の類なり。  
尙進みたる者には左の數種あり。

(イ) 其地の性質と現象に因るもの、

(ロ) 其地に屬する物の性質に因るもの、

(ハ) 其地と他の地との關係に因るもの、  
(イ) に屬すべきものには一般の性質を取るものあり清瀧、鬼の窟 (恐ろしき外觀に譬ふ)、夫婦岩 (相並びたるを形容す) の類なり。

又其他の一部の性質并に材料、廣狹、位置、數量、新古等を取るものあり、例へば北海道の Peketepet (明かるき川)、石山、大森、高野、一つ岩、新山等の類なり。

また自然の現象に因て名けたる者には大湧く谷、湯の川の類なり。

(ロ) に屬すべき地名には其他の住民、動物、植物并に鑛物岩石等に因るものありまた人造にかゝる家屋、船車等に因るものあり或は種々の現象に因るものあり、例せば「アイヌ」澤、蝙蝠の窟、杉の木峠、石灰山、金山澤、砥澤、小屋の澤、船置き川等。

(ハ) に屬する者は一地名を他の地所に比して命名せる者なり例せばアジア、

小アジア、大瀧、小瀧、前ライン地方、後ライン地方、イギリス、新イギリスの如し。

(第二) 人事名稱

人事の雜件に因て土地に命名せしものにして土民の性質、職業、習慣、商業、財産、開化の度、品行、宗教、行政、郡制、等の雜事を視察したるものなり。例せば行者穴、賣買城、切支丹坂、親王塚、其他種々の人事上の名を取りて地名に加へたるもの。

(第三) 土地發見者等の名を取りたるもの例せば、  
ペーリング海、倫宗の瀬戸の如し。

(第四) 新來の人士地の舊名を其儘に取り用ひたるもの (多少訛あり)  
地名の類別斯の如く夫れ廣大なり、從て其意味に因て解し得る所の事實極めて多し。

また旅行して其地の事實を調査するに通辯を伴ふが如きは極めて不便にして調査の進歩を妨ぐることに頗る大なり、自ら進んで其地の土人語を學び、之を以て談ずる者は自から土人の歡心を得、又物を問ふも自然に口より發する眞實なる返答を得るなり、半熟なる言語にても自然土人の間に於て相笑話し得る時は、他の言ふ所は興に乗じて心中を明かす事あり、又同國人と相談するが如き感じして虚飾なき眞事を露す事あり、之に反し通辯を以て物を問へば極めて遅きのみならず、又土人も眞に吟味に合ふが如き感を生じ、早く間に倦み又極めて短き答を以て免れんとするものなり、特に人種并に土俗のことを究むるには其土人の語を知ること極めて肝要にして自然言語上に現はる所の人種固有の現象、(風俗、習慣、禮式、思想、開化の度其他)は更めて之を問ふよりも却つて言語學上容易に之を明にすべし、漁業に熟したる土民は水産物名に富み、獵を以て生活する土人は獸類を其生育の期に因て種々に命

名するあり、唯天然の物産に因て日を送る者は天然地勢の名稱、動物植物の種類を極めて細別す、又禮式の複雑なる人民は代名詞の種類、動詞、形容詞の語尾等に貴賤の別極めて多く、又理學の考多き者は意義に小細の區別精密なる言語多し。

探檢の爲め旅行するものは、先づ其地の土民を以て先導となし、之を使役せざるべからず、又廣く天然物を採集するには親から巡回して實物に接する前に豫め土人語の表に就て大略其地の動植礦物の種類并に其利用法を知りて集むるを優れりとす特に「アイヌ」の如きは精密に植物の種類を分かち、凡そ三百の植物に一々命名し、初來の植物學者は速に解し難き變種の區別をも爲すに至れり、北海道に始めて植物を集むるもの余井に宮部氏合著の北海道アイヌ語植物名詳表(地學協會報告明治二十五年)を用ゆる時は、必ず多少の利益あるべし。

半開の土民は開化人よりも却つて天然物の觀察に委しきことありて、地勢等に關する名稱は學者の未だ注意せざる所の點に達するもの多く、開化人の地理書を編する時に當つては自然野蠻人の地勢類別法を借りて記事を精密ならしむる所少しとせず、アイヌ語中斯の如く意外に高尚なる地理上の名稱は余がアイヌ并に日本地勢上の單語（地理協會報告明治二十五年）にあり就て見るべし。

今一二の例を舉れば「山の澤にして未だ道路なきも之に沿て上下し山脈を越ゆるべき緩かなる傾きの者」を「ルヘシヘ」と名け、「平かにして通例草の生へたる乾きたる地」を「ヌツ」(NUT)と稱す共に學術上の記事に入れ用ひて利益ある語なり。

アイヌ語は今僅に北海道とカラフトに於て二萬に達せざる少數の土人が用ゆる所にして其語の構造等は實に他の外國語と異りて、何れの國語とも親密なる關係を有すること無しと雖も、昔はアイヌ人日本の大部に住居し其痕跡は地名の上に於て存するのみならず又歴史上日本人と交際せし事決して少しとせず、今日に於て此衰滅に向へる「アイヌ」并に其語を研究して書籍上其跡を存せしむるは學者の急務なるのみに非ずして此語を實地の用に供し、大なる利益を占め種々の困難を避るは日本地理學者の多少注意せざるべからざる所とす。

### ローマ字變革論

「ローマ」字を以て日本語を寫すにはローマ字會の規則に従て記すこと通例と爲り、之を以て格別の不利益を感じず、又農商務省地質調査所の地圖等に於ては嚴重に一定の「ローマ」字會規則を守りて、難讀を以て世界に冠たる日本の地名を寫し、旅行者の實用に利ある事疑なきなり、固より理論上の適

否を論じ、横文電信に於ける綴字の不經濟「ABC」の數にて料金を定むる場合」體裁の如何を彼是すれば「ローマ」字會の「ローマ」字は決して完全無病の者に非ざれども余等は實用に誤り少く、學び易く、忘れ難く、世界の開化人民に一ト口にて用法を説き易く、且つ日本にて流通し來りたる便法として誠に結構の者と信するなり。

然るに厭き易きは人の心にして、從來の「ローマ」字書を改革し却て改惡に傾くを知らざる人あり、遂に文部省がローマ字書き方調べを行ひて世の厭き男の好奇心を押へ附くる事の必要を見るに至れり。

余は從來の「ローマ」字を辯護するものに非ず、文部省の新案「ローマ」字を釐成するに非ず、鐘詰の上書き及び停車場の驛名に時々見る規則なき書方を喜ぶに非ず、唯今日「ローマ」字書きを改めんとする人が種々の關係上に學界其の他の大變を起し、驚くべき損害を生ずるを示さんが爲め、爰に「ロ

ーマ」字の變革論を草するなり、即ち「ローマ」字書きの小變は社會の大變にして有害無益の大變事なる事を説かんとす、余はチエンバレーン氏の攻撃論を一讀せしに非ず、唯「ローマ」字改革を以て全く大變の害惡を爲す者と信するなり、本書の讀者其の心して一讀せよ。

### 第一 國語と文字

一國の文字は決して其國民の發音を精密に寫し得る者に非ず、特に舊來のカナ書きにてサムラフをソーローと發音し、テフテフをチヨーチヨーと發音するが如きは口傳を以て僅に其の發音を知るのみ、ムマ、ムメの類は古來の發音の變遷に因て今は、ウマ、ウメと云ふならんか、余は言語學者に非ざれば此邊の事は知らず、何程精密に寫したる語も時代に因つてカナと異りたる發音を生じ同時に其カナを變ずる事を忘れしかと不思議に思ふもの多し、尙ほ「鼻に掛りたるが」(東京人の「小學」を發音する時のガ)はカナに於て之を

ガと區別せず、歌讀みは兎角に濁音の記號たる點を嫌ひて附けずと聞く、甚だしきはイギリス語の KNOW を no と發音し、フランスの est を e と發音するが如き國字改良論者は是に至つて茫然たりと雖も、習慣は猥りに破り難し。

言語の變遷が天然に従ふ時は之を防ぐべからず、又書き方も自然に變ずるなり、此頃に至り綴字の改良は次第に實行せられてドイツにて Photograph を Potoiraf と記す人さへ多くなりたりと聞けども、未だ俗音の種々あるを一々精密に寫して日用文に入れんとし、又は俗音の何々は何と記すを以て學理上の精密を顯すなど、言て、從來の書方を根底より顛倒せんとするの好奇者流が勢力を得し事を聞かず、我が日本語の如きは未だ聲音上の調査充分に行はれず、仙臺人が務めてシとスを東京人のシとスの如くに發音してカナにてシと記すは古來の習慣にして一概に東京正しくして仙臺誤ると云ふべからず、

また日本國中のシに近き音を殘らず調査して之に相當する書方を實行せんとするが如きは不都合の至にして何の得る所も無し。

又日本語に於ける子音を彼此して「私」は Watakushi. にあらずして Wataksi. と記すべしと教ふるも、國民に左程の耳無く、左程の聲音學上の知識無き間は無益に人を苦しむるに過ぎず、固より文學は國語を精密に書き得る者に非ずと諦めて國民相應の便利法にて満足すべき者なり。

序に記す日本語に非ざる語を日本語と同様に記す時は日本語のローマ字書きとは別事なり、北海道のアイヌ語、臺灣の支那語等是れなり、爰に論ぜず。

## 第二 書き方の規則

m と書きて m と讀め、p と書きて r と讀めと言は、イギリス學者は驚くべきも、ロシア語先生は常の事と思ふなり、何事も斯くせよと定め人々同様に心得て書き方を一定すれば文字の効用は之にて足れり、ローマ字も「大抵發音

通り」にして語尾の n の外の子音には大抵常に母音を附し、ジとチは兩方共に j とし、「大抵の子音はイギリスの普通の子音の音、母音はイタリヤの普通の母音、長き母音は母音の上に横棒を引く」等の少々の規則にて充分都合よく日本語を記し得るなり。

此簡便なる規則にて世界各地方の人容易に日本語を寫すべし、何ぞシは Shi に非ずして Si なり、シヤは Shi に非ずして Si なり、チは Chi よりも Ci を善しとす等の新規則を出して人を驚かすの必要あらんや、理學上の議論と實用の利益とは互に相讓るべきものなり、また從來のローマ字規則を破る時は今日までの地圖其他に於ける書き方と新規則の書き方と一々斷り書きせざれば「何と讀むべきか」の惑ひを來し、讀者の困難は察すべきなり。

新規則が完全無缺なるも尙ほ改革の悪しきは明瞭なり、況や新規則に格別の長所なきか、長所短所相半するに於てをや、或人々が「附合ひ」「三重縣」「香

等の語を擧げて、汝が「ツキアイ」「ミエケン」「ニオイ」等の如く發音するは誤なり。

Tsukiyai, Miyeken, Niyoï と發音せよ、また其様に記せよと言ふも「尙ほ此等は實際に於て調査したる上、コンナ書き方に従ふべき語を定むるを良とす」と云ふが如き遁げ方にては我等決して満足する能はず、平日發音せざる様に綴れとは壓制なり、嗚呼世には如斯新案を造る人もあり。

また横文電信の文字短縮を謀らんとせば「頗」は Sukobur と記すより Skbr を以て經濟とす、是等は其時限りの「判じもの」に止めて一般の法と爲さざる事を望む、また「子音にて終りたる語尾は云々」「二つの子音相續の時は云々」と云ふが如き論は尙ほ十年間は聞きたくなしと國民は申すなり。

其他ウメを Ume と書き、次郎を doro と書き、結城の停車場を Dja, 三石を Mitushi と書くが如き普通規則に外れたる例は世間既に多し、何ぞ之と競争



する様に他に新しき書き方を發明して「斯くしては如何」と世間に相談するの必要あらんや。

### 第三 外國人に對するローマ字書きの性質

西洋人に向つて日本人名の横文名刺を出せば是は何と讀むぞと問ふ、説明なくして満足に讀む人は更になし、即ち、「日本の人名地名は子音をイギリス、母音をイタリア流に記す」と云はば大抵何人も讀み得るなり、新規則の奇妙なる綴を用ふる時は一枚の名刺の説明に長々と雜則を并列するに至りて頗る滑稽なり。

又地理學上の知識を擴むべき地圖の地名讀方に一々規則書きに對照して心を苦しめ、又此を寫す時に一々考ふる様にては貴重の光陰を浪費するの恐あり、「日本も西洋に譲らず別に新規則にて壓し行かん」などと言ふ人は狹き心にて博愛の人に非ず。

### 第四 日本人に對する注意

現用のローマ字は容易にして使用するに當り格別の苦なきも尙ほ時には不思議の誤をなす人あり、聲音學は本邦人の頭腦には尙ほ幼稚なり、徒に學理上の適否を以て從來の法を改め是にて本邦に學問上秀逸なる書き方を輸入せりなど、思はゞ大なる誤解なり。

又 *Sha* を *Sya* と改めて理窟に叶へりと言はゞ、一層嚴重なる論者は第一の *S* 字の當否に就き喃々すべし、上には上ある者なり。

又僅に一定し來りたる本邦の「ローマ」字書きは幸に得たる習慣なり、今此習慣を破らんとせば多少の勞を要す、更に新規則を教へんには他の勞を加ふ、然して得たる結果が從來の「ローマ」字書きに比して何等の長所も無きに至つては全體徒勞なり。

西洋人が其の著書に於て種々の書き方にて日本語を寫すも其は其の人の癖に

して從來のローマ字は破壊すべき程の罪なし、既に之に従つて記したる有益なる地圖等甚多し、俄に新規則を輸入するは何の益もなく、然して其害頗大なり、學理上の聲音學の議論は暫く猶豫すべきものなり、況や本邦語の發音調査も猶創始の期に在るに於てをや。

### 探檢旅行者の經驗

遼東我有となり臺灣我版圖に入るに及んで新聞紙上に短く且つ少しも連續と順序なき通信に因て都人士は其地の狀況を知る事を得れども決して之を充分と稱し難し、何となれば新聞社の派出員は多く地理學者に非ず即ち天然を觀察する法を學びたる人に非ずして、唯隨聽隨筆流に事を列記するが故なり。或る老輩は坐して人の報告を讀むを樂しみ、或る少壯者は自ら新境土に入て其奇を樂まんとす、或人は一概に探檢を危險の業と爲し、或人は全く危險と云ふ

語を知らず又他の人は危險を避けて適宜に多くの材料を集めて歸るなり。北海道の測量員、臺灣の探檢は云ふに及ばず、アフリカ内部の巡回者の如きも旅行中に死せるものは其例極めて稀なり、また高山の溪間は岩石高く聳へて人の通行する路もなく、其遙に俗界を離れたる所は唯天然の力に任せて人の之を如何んともせざる所なり、飛鳥枝に戯れて人に劫されず、走獸流に漁して食に厭くことを知らず、斯の如き所は實に詩人の好材料にして、謂ゆる風流なるものは眞に斯の如き所にあるべく、惜い哉風流を裝はんとする老詩人は斯の如き所に行くの力なく、斯の如き所に行く者は亦た詩の如きに心を痛めず。

一羽の蚊を追ひ廻はして疲るゝを知らず、一點の蚤に夢破られて又結ぶことを得ざる優柔なる紳士を誘て天幕の旅行を試みんか、シベリアのタランタス(馬車の類にしてバ子なきもの)に乗せて一週間の晝夜兼行を爲さしめんか、

其境遇の全く平常と異なるに因て、不平の聲は盡きて疲勞の呻めきを聞き、傍人遂に涙を流すべし。

人の異境に赴くに當ては友人相會して之れに問ふことは常に一樣なり。

危険はなきや、猛獸と賊の徘徊する事なきや、汝に短銃ありや、氣候は

如何、食物は如何、宿舎は如何、………

親戚の者之に戒めて言ふ。

汝彼地に赴きて知人ありや、衣服を多く携へて行くや、汝の好む所の食

物は彼地にもありや、

問ふ所限りあるを知らずして一も適當なる事を問はざるは皆旅行の術を知らざる人なり、少しく探檢に従事して我家の外に出で、無人境土に數十日の小經濟を爲せる者は決して然らず、巡檢中の衣、食、住、運搬の法、土人の状態、天然物利用各順を追て人に質問して多きに過ぎず、又及ばざる所なきの

旅行準備を爲す者なり、又經驗ある人の恐るゝ所は野獸に非ず、食物の變化に非ずして、意外の所に恐るべきものあり、又常人の恐るゝものにして毫も怖るゝに足らざる者多し、今左に順を追て探檢旅行者の準備、旅行の術、并に種々の注意を述べんとす、余のシベリア通行の記事、遼東巡檢の略報、北海道山間經歷の報告の如きは其一斑を見るに足るべしと雖ども、尙ほ能く記事精細を盡して寒國熱地共に其注意すべきことに洽く入りたるものは「ゴルトン」氏の旅行の術 (Golton, Art of Travel, 1876) にあらず。

#### 準備

誰れにても異國に赴きて觀察を爲し得べき者に非ず、往きて地理其他を調査せんとする者は特別の資格なかるべからず、身體健康にして華美を競はず、又粗食粗衣を意とせざるものにして相當の忍耐力あり、また普通學の素養ありて實地觀察の練習を爲し、且つ順序を立て、記事を作る事を知る者に非

されば之を遣るも益する所なかるべし。

例せば低き山も見る人の目に因て高く見ゆる所あり、畫工の畫きたる富士山は其傾き急なること人の知る所なり、斯の如き山には決して草鞋を穿ちて上るべからず、また人の畫きたる山は實地其傾きを急にせざれば明瞭に山形を示し難しと云ふ事あり、其他距離を歩數にて示すにも夕刻の一步は早朝出發の時の一步とは寸尺を異にするものなり。川の幅を云ふに水中を歩行して何歩と云ふが如きは急流と緩流に因て大差あり、遠方にある者は其位置に従つて大きく見えまた小さく見ゆる者なり、豫め人の報告と人の畫圖を見るに於ても亦多少分別の力なかるべからず。

斯くの如く人の圖書を批評して其何の點最も信に近き者ありやを察し、得らるべき材料を悉く集め出發に先ちて豫め多少巡回線の設計等を爲す時は巧拙の差極めて大なる者あり。

二枚の地圖を對照すれば何れを信とすべきやに惑ひ、地名の同異を辨じまた地名の冠詞、地名の語尾を扱ふにも旅行者其心を苦しめ、製圖者の流義に因ては地勢險に過ぎたる地圖もあり、土地を爲す所の岩石を知て未だ其地に行かざるに早くも其地の險否を知る人あり、地名を少しく解して忽ち其地の天産物を察する事あり、自から測量法、製圖法を修め、また少しく(學問流の)地理を研究したる人は、探檢の旅に於て人に優る所實に大なり。

出發に臨んで同行者を定めまた携帶品を選ぶは全體の成績に關して最大なる利害を生ずべき者なれば決して一朝一夕に目錄を製し草々の際に之を處理すべからず平日目錄様の物を作り、又人の巡回報告等に因りて之を増補し置くべし。

巡回に行きを増す時は之を運搬すべき人の數を増すべく、人の數を増せば其食料を増して、更に運搬人夫を増す者なり、故に携帶行李は極めて少量を善

しとしまた不時の天災に因て何時なりとも所持の品を放棄する必要ありと知るべし。また巡回は急にして屢々休息するよりも緩にして絶へざるを善しとす、使用する所の土人等は意外に怠惰にして我が熱心を毫も察せず故に事業は決して活潑に進歩せず、また食料の貯へも平日都に在る時と異りて多量を要し、大雨洪水其他の事に因て進行を遮られ、また人夫一人病に罹りて全體の探検隊一日の休業となる事あり、此等も注意せざるべからず、余は主として同行者を減ずるの説を取り又特に通辯を避くる者なり。

外國語速通術を讀み之に因て急に其土地の語を學ぶことに心掛くべし、また之を充分に學ぶことを爲さざるとも少なくも常用の單語を集め持ち行くべし、決して多くの語を要せず缺くべからざる凡そ三百程の單語にて足れり。

通辯を連れ行くことの不便は通辯病氣の時、健康體も亦一隊擧て休業せざるべからざるにあり、また普通の通辯は決して旅行者に非ず之を伴ふて險地を踏みまた高山に昇るが如き事全く望みなき事多し、直接に土人に向て道を尋ね、里數を問ひ、地名を質すが如きは決して多くの語學練習を要せざる者なり。

携帶品、衣、食、住は一日も缺くべからず其他調査用品あり雜具あり同國人の分と土人の分と差別あり通例土人には要用品少きを以て同行者には成るべく同國人を減じて土人を益すを善とす（但し盜難等の災を考る時は多少の斟酌あるべし）、また雨具も特に準備せざるべからず、食料品の外に極て大量を要する者は草鞋なり、野蠻人と交際するに必用なる「遣ひ物」も入用なりまた雜品運搬用の包み紙、ムシロ等あり、凡て此等の品を目錄となして見れば少きが如しと雖ども之を一塊に積み上ぐる時は誰も其の量の大なるに驚くべし。

例せば一巡回者が一週間を期して一の山脈を横断する時は何程行李糧食を節するも二人以上の人夫を要し、廿日ならば拾人以上の人夫を要するものなり、鍋の如きは一箇にても其形大にして且つ破損の恐れあり、米俵等の如きもの草鞋の如きものは誰も其のカサの大に驚くべし。

携帯諸道具の主なる物は斧、鋸、鋸、鋸、小刀、漁獵の具、桶又は其代用品、袋、籠、料理の具、柵、提灯、細引等、(木登り、崖下り等にも用ゆ) 其他種々、

假居を作るべき者に種々あり、其重なる者を天幕とし、また之を缺く時は布又は木の皮にて屋根と床を造るべく、草の葉にて屋根、壁并に寢床を得べし、また獸皮にて袋を作り其内に上りて首のみを出して臥し、晝は之を以て行李を容るゝに用ゆるの法あり、全く何物をも得ざる時は清潔なる砂中に穴を穿ち風を防ぎて眠るもよろし、木の枝を集めて上に衣服等をかけ眠るも可なり。

天幕には圓錐形なるものあり、また長方形なる物あり、布にて作り、風を避くるには風に當る方の幅を狭くなすべし、圓錐形の者は多人數を容るゝに適すれども中央に柱ありまた長き柱を要するを以て山間に運搬の便なき所にて到る所新に柱を得ざるべからざる時は特に不便なり、また如何なる材料の天幕にても雨中には内部に雨水しみ渡りて屢々漏るゝとあり、大雨來る時は天幕の周圍に小き溝を掘りて雨水の流れ入る事を防ぎ風烈しき時は近傍の大樹忽ち倒れ又其枝の折れて落る憂あり、近邊の崖より石の俄に落ちて轉び込む事もあり、宵に流に臨んで月を賞するに適すべき圓滑なる砂地は夜中の大雨に洪水の難あり、薪を得るに便なる所、地盤に凹凸少き所、飲用水に近き所を選ぶも必要なり、また風の方向に對する斟酌もあるべし、なほ其他の植物の状態にも注意なかるべからず、茅は芘りて軟き寢床の敷き物になすべく、

笹藪は何程注意して刈るも危険多し。

また天幕漏るゝ事を防ぐには屋根の上に油紙をかけ又は上の方に更に少しく間をおきて第二の屋根を置くべし、天幕の底は或は草を刈て作りまた滞在長きに亘る時は木を割きて粗き板を得て寢床を作るべし、時に寢床の棒などを持ち行くは不便の地には之を爲すべからず、故に天幕の中にては大抵草の上に蓆并に毛革、毛布等を敷きて直に之に臥す者と覺悟すべし、夜中色々の蟲天幕の中に飛び入りまた這ひ入りて夢驚かされ、或は濕氣一面に満ちて衣服に不快を感じるが如きは普通の事と知るべし。

天幕内に火を用ゆる事は容易ならず、また炭酸等の悪氣を避くるの法なかるべからず、蚊帳には所に因て目の極て細き者を要する事あり普通の蚊帳は微塵の如き細蟲を防ぐに足らず、又如何なる蚊帳ありとも外出する毎に衣服に附着して天幕に入る蟲は決して防ぐべからず、巡回中蟲に苦しむは甚しき事

あるも決して薬にて之を防ぎまた其刺されたる跡の膿化する人は人に因て度を異にすれども、シベリヤの臭蟲を避けんとして、防蟲劑を持ち行き、北海道沼澤地の蚊を避くるが爲にヨーロッパ婦人の顔掛けの如きを被りて行くが如きは不快にて煩し、之を用ひずとも旅行者は百難に堪ゆる事を學ぶべきのみ。人に知られざる様に露宿するには笹藪ある林を善しとす少々の煙りは樹林中に在て善く匿るるものなりまた笹は人の踏み付けたる跡に忽ちはね反りて人の足跡を示すことなし、又秘密旅行に犬馬等の聲を止むること兼て注意すべし。

敵の近づくを明かに知らんとせばジャリの多き所を善しとす人の足音を聞きて目を覺すこと容易なり。

食用品にて缺くべからざるは米（又はパンの如きもの）の外に鹽又は味噌等とす（其地にある所の木の實、草の根もまた食すべきもの多しとすれども米

などは日本人に缺くべからざるものと云ふべし。漁具、獵具を以て食料並に副食物を得る事あれども、特に鐵砲を以て鳥獸を求むるは別段の時間を要しまた魚も時と所に因て全く之を得ざることもあり、醬油の如き多量の流動物は動搖して之を運ぶ人夫に一種の不快あり。副食物にはキリボシ、イモガライモガラの如き容量の少くして煮て膨脹し易き者を善しとす、罐詰其他の諸品務めて節減すべし、食に馴れざるものを食するも空腹の時は害少しと云ふ。

#### 藥品と救急品

其他に因て藥品を選び持ち行くべし、流行病の如何、毒蟲の種類等をも考ふべし、また連日沼を渡りて足の指爛れたるが如き普通の事は各地の土人に多少の療法あり、例せばキワダの樹の内皮を黒く焼きて其粉を指の間に塗るの類なり、北海道のアイヌが「踏みヌキ」を爲したる所へ我小便をかけたるは

某醫學士の説に依れば消毒法の一なりと云へり（イギリス東洋會の雜誌にアイヌの製藥材料の事あり是れも参考として面白し）、吐劑、下痢の藥、熱の藥、脂藥、蟲毒に對する藥其他絆創膏等は常に缺くべからず。

#### 着 衣

熱帯の旅行と寒帯の旅行とは着衣を別にせざるべからず、熱帯旅行に關しては「熱帯攝生法」と稱する著書ありて多くの注意を集め、ヘルリン大學人類學上の講義にも熱帯攝生法と云ふ一課ありし事あり、然るに「寒地衛生法」なる者を聞かざるは寒地の凌ぎ易き證據なり、燈心製の廣ブチ帽子、フラ子ルの肌着等の熱地に適當なるが如きは誰も知ることなり嚴寒の地にて耳被ひの必要なること、雪の上を行きて雪目鏡と稱する灰色の目鏡を用ふること、草の中を歩行する時ロシア流の長靴太股に達する者を用ひ、また藪を潜ぐる時全體厚革にて作りたるうわ着（ノルウエー、ロシア等にあり）を用ゆるは極め



て安全なれども總べて重くして堪へ難し、日本流のワラジカケの足袋は軽くして便なれども刺多き草の中にては傷を爲す事を覺悟せざるべからず、又連日川を渡りて探検を爲す時は二日目にて口を開く事必然なり、日本流のワラジは水中にて用ゆれば一日に少なくとも一二足を使ひ切る者なり、麻にて作りたる草鞋、シロ皮のワラジも決して價の貴きに比して著るしく長きに堪ゆる者に非らずと知るべし實にワラジは旅行者の頗る苦心すべきものなり。雨除けの外套も亦た頗る選定に苦しむ者にして、携帶に輕き者は必ず雨を透す者なり、又如何なる材料にて作るとも多少の雨水を通さる外套は殆ど無しと言ふも可なり、北海道の如き所にてフキの葉の頗る大なるは大雨忽ち至る時之を取て二三枚を重ね被りて雨を凌ぐことあれども殆んど一時の興に優るのみ。

### 進行線の方向、距離の測定

草深き所に入りて何の目標を選ぶ事なくして直線に進む時は大抵は自然に左に曲り行きて同一の起點に戻りて驚くなり、數回大木に登り磁石等を携へて山形を見、進行の方向を確定せざるべからず、また草叢を押し分けて進む時は決して歩數等にて距離を定むること難し平均一時間に何里を行くと見做し、巡回中は必ず發着の時刻と休息の長さを各點に於て帳簿に記入し置くべし(物の音にて距離を略測する法あり)物の高度並に山の傾き等は地質學者の傾斜儀にて略測すべし。

深き笹藪のみを分けて進む時は一日の進歩僅に二三里位の事あり。

### 飲 用 水

廣き野に入りて何處に水あるやを知らざる時は柳又は他の濕地植物の叢を遠望して其地に急ぎ行くべし、また獸類の常に徘徊する所の道筋は草の生長短くして善く見分けらるゝものなり之に付て進めば多く河に達する者なり、又

地名等に因て前以て飲用水の在否を豫察する事あり、水の良否は畜類の善く見分くることあり、また水コシ等も必要品の一なり。  
水無き所或は悪水の地に水入れを持ち行くは論を俟たず。

## 火

人は火を用ふる動物にして火なき時は一日も生活せずツケギ、マツチの外に種々の薬品並に摩擦等にて火を出す法あり、例ば氷の片にて小さきレンズを作り太陽の光線を利用して物に焼き付けることあり、最も缺くべからざるはタキツケにして針葉樹の枯葉、カバの皮、ニレの類の小枝の如きは何程濡らしても容易に燃ゆる者なり、巡回中見當る時は之を採りて行くべし、夕刻天幕の火に不便を感ずること兼て注意すべし。

## 運搬の具

家畜、馬具、馬車と適當なる小舟の外に假製の筏、木の皮にて造りたる舟、

葡萄蔓にて作りたる籠の渡し、(柳の皮フキの筋の如きは皆取て繩に用ゆべし雪中には藁の繩は凍りて折れる故動物の皮にてソリ等の繩に代ふべし、其他野蠻風運搬法の一として籠を水に浮べ泳ぎながらにして之を押し行くことあれども所に因りては應用し難し、不潔なる支那人の如きも水に濡るゝことを厭ふは奇と云ふべし。

旅行者は水に陥りても游泳して免るゝの覺悟なかるべからず、水を渡る時石を持ち行きて體の重量を増して急流に流されざる用意等も亦肝要なり、又行李は水に落すとも内部を害さゝるの用意は常に缺くべからず、臨時に渡船用の丸木船を造るには凡そ一ヶ月位は費る者なり、又舟行して河底に大木あれば之を切り除くの間を要すべく、之を除き難き時は行李を陸に揚げ舟を沈めて障碍物の下を押し通はすこともあるべし全く陸に揚げて多人數舟を擔ぎ行くこともあるべし、故に舟の重量、大小等の選びなかるべからず。

船に乗りて靴を穿きたる儘水に落つる時は足の働き不完全にして泳ぎ難し是れも注意の一なり。  
川の幅狭き時は岸にある樹木を或る方向に伐り倒して臨時に架橋すべしと雖も、其上に假製のフキの草鞋、木皮の草鞋等は注意せざるべからず、極めて滑かなるが故なり。

#### 食物置き場

巡回中の都合に因て或所に食物を貯ふるの必要あり、樹に下ぐれば鳥來りて食ひ、地上に置けば鼠等の害あり、又庫を作りて入るゝ共土人の盜難なきを保せず、安全なるものに入れて地中に埋め置くと雖も經驗ある者は疑はしき所に水を注ぎて軟き土の低くなる状態に因て發掘することあり、實は物を匿す事は頗る困難なれば時に應じて臨機の所置なかるべからず。

#### 謂ゆる旅行中の危険

蠻人は猥りに文明人を恐ると雖も各國種々の禮式ありて注意せざれば危し、例せば北海道アイヌ家屋の傍に神聖なる所あり爰に一度限りの便所を作れば大罪なり、ドイツ人は人の月給を問ふを無禮とせずして少女にも老婆にも其年齢を問ふを失禮とす、日本にては貴女の手に口をつけければ言語同斷にして西洋にては之れを最敬禮となし、日本にては決して云はざる「汝は汝の國王を愛するや」はヨーロッパにては各別奇妙なりとせざるの類なり、一國にて忌む所他國にては忌まざることあり實に奇と云ふべし、他國に行く時は決して自尊心を固くすべからず。

野獸も猥りに人に近く者に非ず誤りて之に會する時は知らざる眞似を爲す時は忽ち逃げ去るを常とす但し狂獸、手負ひ猪、子持ち熊の如きは此限りにあらず、また巧みに道を曲げて逃ぐる時は随分逃げ得らるゝ者と聞けり。

敵若し我を窺ふ時は免ること多く難し、野蠻人の内に軍隊組織の旅行を爲す

時は難少なかるべきも普通の探検旅行には唯危地を避くるを善しとす、若し調査に餘念なき時に於て突然の來襲を受けたる時は大抵助からずと知るべし、故に短銃、短刀を所持して護身となさんよりは成田山、水天宮の方を遙に優れりとす呵々。

#### 巡回中の諸規則

二隊の間に於ける合圖の法、手紙を途中に置いて第二隊の人に發見せしむること其他一隊中の規率等大に注意すべき箇條少しとせず。

#### 天然物の利用法

開化人は多くの器械ありて天然物を其儘に利用すること少きが故に、是に至つては屢々蠻人の教を利用すべきこと多し、人種學の書物に就けば野蠻人の天智は恐るべきものなり。

#### 二日間に箱根の遠足

東京地學協會は明治十二年の創立に係る地理學研究の會にして雜誌書物、地圖等などを出版し、展覽會を開き、又學術上の探検費を出し其他文庫を保有して廣く世間に益することを爲せり、又今年は同會の第三回遠足會を催し、會員及び有志者三十餘名を指導して箱根火山を巡見せしめたり。此催しに關する委しき記事は地學雜誌に出すも、余は爰に其實地に見たる事柄を大略に記し、中學生徒等が春夏の休日を箱根の地理に利用するの參考に供せんとす、(記入の事實は主として平林氏の調査に従ふ)

○参考すべき圖書凡そ左の如し、尙ほ函山誌(箱根の諸所にて發賣す)及び溫泉宿にて客に呈する溫泉案内等あるも、此等は地理に關する事の外に詩と歌などを多く含みたり。

## 一、參謀本部の地圖

二、平林氏箱根熱海兩火山報文(震災豫防調査會報文拾六號、明治三十年)  
 三、同氏の報文を略したるもの(地質學雜誌)

○巡回の順序 午前七時過ぎの汽車にて東京の新橋を發し、十時頃國府津の電車に移り、十一時頃箱根の湯本に着し之より步行、畑宿より瀧坂に昇り、蘆の湯に達し、精進池より駒ヶ岳に登山し、夫れより元箱根に出て同所又は箱根(元箱根より凡八丁)に於て投宿す(此日の步行凡そ七里)

翌日は元箱根より步行又は小舟にて湖尻に至り、之より低き坂を登り姥子の湯に至り、尙ほ上ぼりて大湧谷に赴き、強羅温泉を経て宮の下に達し尙ほ湯本迄步行し(此日步行五里程)夫れより夜汽車にて東京に歸る(此巡見にて省きたる場所少なからず、餘は平林氏の報告にて見よ)

○巡視すべき事實 箱根火山の地勢大要、早川と須雲川の水蝕、双子山の山

形、瀧坂の嶮、箱根火山の外輪の内側(即ち蘆の湖の西に連りたる山側、明神山の西側等)駒ヶ岳上部の地勢、神山の地勢、神山の泥流、神山の火山、仙石原の地勢、蘆の湖の地勢、富士山の山形、大湧谷の噴氣、硫黃結晶、沸泥、熔岩、火山灰砂、火山集塊岩、早川の層灰岩、箱根火山の變遷。

○湯本より畑宿まで(凡そ二里弱)の所見 電車湯本に着すれば乗客は早川に架せる橋に至りて其河流の壯なるに俗間の苦を忘れ、佇む事暫くして或は早川に沿て進み宮の下の淨境に赴くもあらん、或は橋を渡りて福住の浴場に入るもあらん、又は福住の前を過ぎ、須雲川を渡りて南岸(東海道)の杉の並木に清爽の氣を吸ふならん、人若し箱根の地理を便利に探らんと欲せば、此第三の人々と共に行きて、宮の下を後にせよ、特に瀧坂の登り、駒ヶ岳の上下等に足稍疲れたる後に公園地の如き宮の下の清淨なる小茶店に憩ふ時は、幽谷を出て喬木に移るが如き感じあり、又巡見者若し地理の視察のみならず、岩

石の露出などを充分に見んと欲せば湯本より畑宿に至る間にて東海道より右折し道路より見ゆる所の湯本發電所に至りて許可を得、同所に屬する鐵管敷設道路（須雲川の北岸にありて東海道と相對す）を歩行し須雲川村の上にて再び東海道に入るべし、此鐵管道路には集塊岸及び安山岩脈の露出頗る多きも之と平行する東海道には此等の露出甚少し。

須雲川は谷深くして且つ廣く削られたる谷をなし現在には水量甚少きも舊時には頗多量にして且つ蘆の湖の水を落したる天然の流路たり、今は同川と湖水との間に小丘ありて、此小丘は全く湖水の沈澱物より成れり、是れ後に蘆湖の水は早川に流るゝに至りし爲め水面に變化を生じ最早須雲川に流れ込まざるが如し、（蘆の湖の最深所は今凡そ百五十メートルの深さあり）

須雲川村の上にて鐵管道路が東海道と相會する所あり、此所に火山灰砂の露出あり、又安山岩露る、之より畑宿まで拾丁程にして、途上格別の見るべき物無きも、双子山の山形は既に充分に望むべし、同山は國府津の西より畑宿に至るまで常に見ゆる山にして二個相並び、共に山側急なり、特に其左手の者（即ち下双子山）の南側は三十五度位の傾斜あり、（地層の傾斜を計るべき傾斜儀を利用して遠方より山側を眺めながら畧測すべし）一見双子山の峻な

ることを感ずべく、然のみならず、山側に谷無くして、岩塊岩片夥しく突出したるは一種の異りたる風を示す、即ち双子山は塊狀火山にして地中より噴出したる熔岩の塊りが一ヶ所に孤立せる山を成すに過ぎず、下双子の頂上には噴火口あり。

畑宿より北方に向へば瀧坂の谷ありて其上部特に峻にして且つ深く刻みたる様に見ゆるは一種の奇觀にして人皆其生成の如何を問はんとす、恐らくは蘆の湖の水一時此所に瀉下し烈しき水蝕を逞うせしならん。

○畑宿より蘆の湯までの所見（凡參拾丁） 畑宿の西終點に石碑あり「蘆の湯

道』と記す、之れより右折して登れば忽ちにして大なる安山岩の露出を右手に見るべし、此岩の所より坂の上までは殆ど岩石の露出を見ざれども岩片の大なるもの途上に多し、上部に小亭ありて夏期には茶菓等の粗品を味ふべきも遊覽人少き時は全く空舎にして唯無味なる落書を見る、是より少しく面白き眺めは絶壁に懸る瀑布にて、瀧坂の名は之より出でし者ならん、小亭の在るもまた此瀧の爲めならん、小亭に憩ひて後一と息に奮發せば坂の上の草生地に至ること容易にして、此邊は一體に火山灰砂の在るを見る忽ちにして電線の通ずるに會し、路傍の木杭に左は蘆の湯と記せり、之より緩斜を登り最高點と思はるゝ所にて四方を望見せよ、眼界に左の諸山あり。

北方に立つは明神山にして其前面は急斜を示し且つ山側に太き横線を夥しく畫したるが如し、是れ即ち箱根火山の大噴火口の外壁噴出物の相重なりたる層にて生じたるを示す者にして蘆の湖の西岸の山側及び其續きなる金時山、

明神山等は皆此外壁(即ち外輪山)の部分を爲すが爲め同様の構造を示し、縦令山側に草木を生じたるも尙ほ固有なる横線を夥しく示すなり。

更に西北方を望めば駒ヶ岳を見るべく其前に早雲山あり、駒ヶ岳は大部分草に掩はれ、滑かなる牧場の小山の如しと雖も其高さ海面上壹千參百五拾五メートルありて、空腹の時に登山を試みる人は苦痛を感ずべし、駒ヶ岳の北にある諸山は謂ゆる『神山火山』の部分なり、翌日の巡見に因て其形を見ることを得べし。

双子山(上下の二つあり)は瀧坂の上にて充分に眺めたる後尙ほ其一個(上双子山の)山側に注意せよ、其傾き急なるも瀧坂の上または蘆の湯よりの登山は容易なり。

東北方にある草山は鷹の巢山にして、所々に赤き禿あるも著るしき岩塊等を望見せず。

此等の諸山中、双子山、駒ヶ岳、神山等は皆大噴火口内に生じたる後時の火山にして始の大噴火口は楕圓形にして長さ三里あり、其火口壁は蘆の湖の西岸なる三國山、仙石原の北に立てる金時山、宮城野の原に臨む明神山、淺間山、鷹巣山、要害山を連続したる線を爲せり。

然れども須雲川の南岸に於ける山は火口壁に非ず。

之より蘆の湯に至り其温泉に休息するも可なり、小さき茶亭に入るも亦可なり、當所の温泉は硫黄泉なり。

○蘆の湯より駒ヶ岳の登山 蘆の湯より元箱根までは凡そ三拾丁あり、途上精進池の南端(蘆の湯より拾丁以内)より駒ヶ岳に登るべし。

之より進みて曾我兄弟の墓、多田満仲の墓、風穴、大なる石地藏等を見て精進ヶ池に至る此池の水には魚類を生ぜず故に精進ヶ池と名く。

駒ヶ岳の絶頂には淺き凹みあり、其中に火山礫と稱せる小石多くして草生ぜ

ず、又最高部の西南側には低き土堤の如き物あり、一の外輪山の殘部を見るが如き感あり。

登山の道は一人立の狭き道にして雨天の時は甚しく滑りて困難なるべきも、

乾きたる時は大なる困難もなく上下に凡二時間も豫算し置けば十分なるべし。

元箱根に於て宿泊し難き人は尙ほ八丁ほど行きて箱根の宿に赴くべし途上塔ヶ島の離宮(外部より拜するのみ)及び舊時の關所跡なる石垣の残りなど見るべし。

○元箱根より大湧谷までの所見 箱根權現の脇より湖水の東岸に沿ひ一里位にて湖尻の渡船場に至るべし、此途上駒ヶ岳の安山岩及び神山の安山岩露出する所あるも大抵は笹の間を行く道にして岩を見ること少し、湖尻の渡船場は元箱根等に舟行する場所なり。

此處に至るまでは、多く駒ヶ岳の麓に行くを以て右には同山の斜面(上部に



は岩多し)を見、左には富士の寶永山を眺めながら、湖水の深き水に臨みて進むなり。

寶永山は富士の側面に破裂起りて大なる凹みを生じたる時に現はれ、即ち此新しき凹みの縁を爲せる一部分の著しく突き出て見る者に過ぎず、故に寶永山は火山に非ずして噴火口の周縁の一部分のみ、此關係は特に富士山に雪ある際著しく見ゆる者とす。

湖尻の渡船場より北を眺むれば小き低き丘の如き者二つあり、また渡船場の東に當る神山より湖水の落ち口(早川の上端)に向て幅廣き小山の延長するを見ん、此小山の廣がりは姥子に至る途中(即ち此小山の上)にて一層明瞭に見るべし、其全體は火山噴出物の一種なる泥流(火山灰等に水の加はりたる者)より成り、神山火山(後に説明するが如く神山、冠ヶ岳及び臺ヶ岳等より成り立ち、大湧谷の噴出に因て半分程壞はされたる者)の泥流の跡と見做すべし。

し、而して彼の二個の岳は此泥流の部分とす。

渡船場より凡十丁位にて姥子の温泉あり、海面上凡そ二千九百尺、温泉に達する前にて西北に向へば仙石原の廣野に耕牧舎牧場の牛馬群を爲すを見るべし、此原は舊時箱根の大噴火口の底の一部にして湖底なりしも神山泥流の爲めに蘆の湖の水を遮ぎられ、今は早川の流るゝ野と變じたり、早川は湖の水を受け仙石原を流れ、後に宮城野を通過し堂ヶ島の邊に外輪山(大噴火口の壁)を破り湯本にて須雲川の水を合せ後に海に潮す。

又東北を望めば臺ヶ岳の南側は甚急にして神山及び冠ヶ岳の北面の急斜面の相對して一の噴火口の殘片なるが如し、大湧谷は姥子より八丁餘に在りて其噴出の爲め此噴火口を破壊せし者とす。

之より姥子を辭し少々の登りにて大湧谷に赴くべし。

○大湧谷の奇觀 大湧谷とは其西の取り附きより東の終りまで餘程の長き間

を稱し到る所に硫黄を含みたる水蒸氣を吐く所ありて、之が爲め安山岩甚しく腐蝕し、一見白土の如きに至るあり、其腐蝕の狀態は大抵岩石の割れ目より崩れ初め、遂に甚しく腐れたる所は地面一體白色又は灰色、褐色等の土となり、復た岩の如き者を見ず、硫黄を甚しく吹く處には美しき硫黄の結晶あり、之を『花硫黄』と名く、金槌等にて熱き岩より缺き取り堅固なる小箱に綿にて詰め貯へて都に持ち歸れば一種の美品なり花よりも美しき花硫黄は點々輝きて俗人の目にも留まるなり、唯之を採取する時に注意して、熱き蒸氣に觸れ、熱湯の小穴に踏み込まぬこと肝要なり、大湧谷の東部路傍の小亭ある邊には穴の中に泥水の沸騰する所あり又時々之を吐き出す穴あり。大湧谷の水蒸氣の噴出は時に因りて甚しく、之に伴ふ硫黄は噴出大ならざるも一二時間停止せば携ふる所の銀時計の表面に黒色の汚れを生ずべし、近傍の樹木甚多く枯死したるは、皆此硫黄等の働に因るべし、又小穴に熱湯の

沸騰したるは凄じき様子なり大湧谷の舊名大地獄は能く之を形容せり。  
 ○大湧谷より宮の下まで凡一里半の所見 大湧谷の一部より竹筒にて湯を引くは仙石の温泉にして余等は之に赴かずして強羅の温泉場に降るべし、途上早雲地獄なる高所を望むべし、強羅の背後に立つて一見山側の抉り取られたる如き外觀あり、是れ亦舊時噴出せし跡なりとす、強羅温泉の邊なる小山は又神山の泥流にて成れる丘にして湖尻の邊にて見たる者と能く似たり、此丘の上にて早川の岸に急下する外輪山を遠望せば粗なる横線を引きたる状態は金時山の南面、蘆の湖の西側等と異ならず。  
 強羅温泉より宮の下に赴くには先づ降りて早川の宮城野に向ひ、道路早川に達すれば尙ほ之に沿ひたる良道を行くべし、早川の谷深くして流れ烈しく、路傍の崖に現はれたる安山岩、火山灰等の露出も亦廣大にして所々に瀑懸れり。

宮の下に至れば對岸の山側に堂ヶ島浴場地の石切り場ありて殆水平の層を爲せる凝灰岩(層灰岩とも名く)を採掘す此岩石は尙ほ湯本まで擴がりて所に因れば稍傾きたる層を示せり、此岩石は箱根火山の基礎を爲せり。

○宮の下より湯本まで凡一里半の所見 道は前の如く早川の西岸に在りて、早川の谷を瞰下して進む、谷は常に深く、特に大平臺(湯本の手前凡一里)の附近にては懸崖四百メートル、谷底に細き水流を見るのみ、大平臺に至れば謂ゆる大平臺集塊岩ありて路傍に露出せり、又早川凝灰岩の露出を新しき灰砂にて掩ひたる所あり、注意すべし。

先きに強羅温泉を辭して早川に降りし時木賀の温泉を過ぎて既に山間の遊歩場の繁盛を感じ、日本の國貧にして尙ほ遊びの盛んなるに驚き更に進みて宮の下に到れば此地の大夏高樓に西洋人の富を吸收するを思ひ、此地に遊ぶ日本人の資力遠く西洋人に及ばざるを覺ゆる時は塵外の山間に世上競争の辛苦

を想ひ出すなり、箱根に詩を作る風流人も亦之を見て多少の感なきを得ざるべし。

以上の旅行は湯本を出て、より閑靜の境を巡りて穩かに地理を探検し、火山の構造、火山の現象、温泉の潮出等を見たる後遂に繁昌の地に入るの順序なり、然して此巡見に因て得たる事實を總括すれば次の如し。

一、箱根山は休息せる大なる火山なり、其大噴火口は楕圓形にして、蘆の湖の西側なる山伏峠と三國山、仙石原の北に立てる金時山、宮城野の北なる明神山、其南なる淺間山、其南なるは鷹巢山、箱根驛の東なる要害山、南なる鞍掛山は總て皆此大噴火口の壁に屬せり一見其故を解し難き所あるも他に火口壁の位置を求むべからず、此大噴火口より出でたる噴出物は外部に迂りて裾野を爲したるも多くの部分に於ては種々の原因にて眞の裾野(富士の裾野の如き)の觀を失ひたり、然れども火口壁の内部は大抵急斜にして特に明

神山、金時山の山側に於て著るし、火口壁の最高點は金時山なり（海上四千餘尺）

此火口壁は初め須雲川上端にて天然に切り破られ火口内全體に溜りたる湖水は之より此川に落つることゝなれり、其後に早川の上部に缺所を生じ此川も亦水落つる所となれるなり。

火口の大きさは、金時山より鞍掛山まで三里程、三國山より鷹巢山まで一里半程なり。

二、大火山内の火口岳、此廣大なる噴火口の底には更に噴出せる火山を生じ、双子山、駒ヶ岳及び神山の火山を成せり、神山は冠ヶ岳及び臺ヶ岳等を合せて一の火山を爲し之に『神山火山』の名を下すべし。

神山火山に大湧谷の噴出を生じ爲めに同山の山體を破壊し泥流を湖尻と底倉に向け流下せり。

三、神山の泥流に因て湖水を遮ぎられ、今の蘆の湖の大きと爲したれども、大噴火口の底を爲せる謂ゆる火口原は其昔に於て今の蘆の湖、仙石原、宮城野の外に双子山、駒ヶ岳、神山火山の所在地をも包括せる大面積なりとす。

四、火山灰砂、諸所に見ゆる粗鬆なる火山灰砂は諸所の爆裂に因て噴出せる物にして、鷹巢山等に水中に沈澱せし跡あるは水に交はりて擴がり居たる者とす。

以上の事實は皆箱根山に於ける地勢と山形の觀察、熔岩として出でたる安山岩の位置、並に灰砂、集塊岩、層灰岩等の關係より知られたることにして、箱根山の地質學上の歴史を明かにしたる者とす、尙ほ安山岩の種類に従て其噴出の時代等を分ちたる者は平林氏の報告に明かなり。

以上巡見の時日を往復共合せて二日とせしは東京諸生徒の修學旅行に適せしめんが爲めなり、然れども是にて尙ほ箱根産物の埋れ木（火口内の火口

丘噴出に因て湖底に沈み泥中に埋没せし樹木の部分)の細工、湯の花(温泉の沈澱物)蛇骨(同上)等を見るの暇あり、謂ゆる湯本細工の翫器等は東京に製し湯本にて販賣する者あるも、亦一二點を購求して可ならん、又一二の温泉に入浴して心神を爽かならしむるも可なり、若し木賀等にて疲勞し、歩を運び難き時は湯本迄人車を取るべく、元箱根より湖尻渡船場までの歩行を厭は、小舟にて此間を行き湖岸の景を樂むべし、瀧坂の登りに苦むものは山駕籠を命ずべし。

### 信濃旅行の雜記

明治三十一年八月九月信濃大町より高瀬川を上ぼり越中立山温泉に至る巡檢途上の雜事を略記せるものなり。

余は三十一年八月廿六日大町を發し信濃と越中の國界を經歷せしが其道筋は

次の如し、大町より三里にて高瀬川筋の葛の湯の浴場、之より六里餘にて同川上流の大なる噴湯丘と盛んなる温泉、夫より四五里(歩行十時間餘)にして山を越て越中の國に入りヒガシ澤(黒部川の支流)に達し、此より黒岳の頂上迄往復し水晶、石榴石等の産地を見、更に四里行程行きて黒部川筋のダイヤ、之より三里半の山越しにて立山の温泉に到り、附近の熱湯池と之より四里程なる地獄谷の硫黄井に噴湯を見、再びダイヤに戻り、更に凡そ八里の山越へにて九月八日元の大町に歸りたり、此旅行の日數正味凡六日、其外に觀察并に雨天滞在を加へ合計十三日程となれり、此間に於ける面白き諸材料に關する實見の内、礦物學専門の事は地質學雜誌第六十一號に譲り爰に信濃越中國界の嶮、高瀬川の大噴湯丘并に熱泉、立山温泉と地獄谷の事に就き雜事を略述せんとす。

### 第一 信濃越中國界の嶮

大塚專一氏が地質本調査の富山圖幅説明書に謂はれしが如く此地方の嶮なる事は皇國屈指の一にして特に越中の黒部川筋は「鷲羽岳より下新川郡愛本橋に至る廿里間は兩岸迫りて餘地を見ず」と云ふ、此川の上流に沿ひたる經歷は決して長く河中の河原を行くが如き便利を得ず、又河側の山の上を行くも屢絶壁に妨げられ大なる迂回を爲す事を要すべし。

又彼の二國間の山越へを爲す者は、今日は唯魚釣りと獵師の類にして普通の人には之を爲さず越中より信濃に行き又信濃より越中に赴くには、一度海邊に出で糸魚川より進むなり、其不便の如何は地圖を披きて驚くべし、此大不便を免れんが爲め明治九年頃針の木峠の道路（大町より黒部川筋のダイヤに至り之よりザラ峠を越て立山の温泉に達する十二里程の新道）を開きしが一年中の最好季節には通行者多かりしも、吹雪其他の時は全く通行絶へ又雪消へと大雨には諸所崩れ落ち、甚しきは猿も驚く崖と爲り然のみならず橋は流れ

て跡を失ひ此唯一の善き山越へも、一年にして忽ちに人の利用に適せざるに至れり（後の記事参照せよ）

此國界の嶮地には固より人の住居無く、唯魚釣り其他の小屋を稀に見るのみ、道路無きが故に河筋の經歷には岸上の深き草と厚き林を避け、多くは河原の石の上を歩行し又絶壁の岩に縋りて難所を越へ、或は水を涉り岸より岸に移りて進むなり、魚釣り小屋の邊にて釣り師の通行多き所に會すれば、岸の上に多少の道の形を爲せども是れは實に稀なりとす、河原の石は流の急にして烈しき爲め大抵粗く行く者は屢大なる石の塊に出會ひて足の踏み所頗悪しく、此亂雑なる石の相重りたる所にて、石より石に移るは靜に歩行するに非ずして忽ち飛び上り又飛び下りて一步一步五體に響くの感じあり、水を涉りするにも亦巨石多きを以て、危く特に硫質泉等の無き所には此等の石に滑かなる苔を掩ひて足も堪まらず、横に倒れて腕にて岩を敲き其上に偶然の冷水浴を

爲すは屢々なり又水深き絶壁の淵に會すれば岸に上ぼりて深き笹井に草を押し分けて難所を超へざるべからず、木の枝に取り付き又蔓を引きて僅に昇り又自然の倒れ木を橋と見て淵を渡る時は器械體操を想ひ出さしむ。

(余が高瀬川の上流にて見たる河渡りの便法は、ハリガ子を用て宙乗りを爲す者なり、鐵線を張りて之に滑車を附したる鈎を掛け長き繩を添へたり、渡る者は我帶を此鈎に掛け體は斜に吊されて宙乗りの體を顯す、是にて彼の繩を手操れば滑車の働きのて此岸より彼岸に滑りて行く法なり、山間にて往來殆無く唯稀に獵夫等の巡行する所には之れを以て橋梁新設費を節減し得て妙なり)

更に山の景色を見れば、高さ百尺、二百尺位の岩崖が何町又は何十町と續く處は珍しからず、殆ど草無き裸岩の突出も又少なからず或は鋸の如き山の背あり或は築き山の如く平たき山頂あれども其山側の傾きは大抵急なりと云ふ

べし、又全體に粗く角立ちたる石の片の崩れ落る斜面(方言之をザクと云ふ)は各所に多くして時としては數百間の高さある者あり、之に従て上下すれば草鞋の裏は大根卸しにて削るが如く若し跌きて倒るゝ時は手足に爬痕を生ずべし、又足の踏み方慥かならずして佇む人も自然に迂りて立ちたる儘に降る事あり、此地方天然の嶮岨斯の如くして滑かなる岩、高き崖、急なる流、烈しき瀑は到處に在り、又トウヒ、カラマツ、ツガ等の純林も一種の壯觀あり、斯の如き景色を數日見厭く時は詩も文も役を爲さざるの感あり、箱庭を見て風流と爲す所の遊惰性の風流人は爰に來て何をか爲さん。

深き林の倒れ木と刺ある雜草には此無人地方の經歷に甚しき艱難を生ずれども、山の高所に至れば尙ヤマハンノキの枝の密にして然も峭の腕の如く八方に彎曲して相抱くには一層の苦みを感じ、此木を方言にてサワフサゲと稱するは善き命名にして谷の障物とは之とホザキナ、カマドに似たる一種の灌木

を最とす、人遂に山頂に登り得ればハヒマツの這ひたる者と這はずして網の如く枝を交へたる者あり、此中に踏み入る時は特に歩行困難にして枝の下を潜る事は全く爲し得べからず枝の上を踏み附けて行かんとすれば屢跳ね返へされて倒まの大的字或は横倒しのYの字と爲りて空く蠢動する事あり。ハヒマツの繁茂する處には白き苔なるハナゴケ厚く地面を掩て綿を踏むが如き感あれども其下に石ある時は足這りて剝がる、苔と共に倒る、事あり。此邊の諸山は海面上一萬尺位の者頗多く大抵の山背は皆高山なるが故に急流を涉り、大石を跳ね越へ、灌木を押し開き、又嶮處を攀ちて僅に頂上に達し快く四方を眺めんとする時は屢霧に妨げらるゝのみならず日光爲に遮られて夏尙寒きに驚く事あり、然れども斯の如き處も亦客を迎ふるに足る者あり、莖短くして葉の小さきコケノキ(Empetrum)は適切に甘き黒色の實を結び味佳なり、其群生せる處を片た手にて浚ふが如く採り集め一ト攪みを口にして嚙

み潰し其皮と種を吐き出すべし西洋人は此實を好まざる如しと雖もアイヌ等は之を喰ふ、之に反して西洋人の嗜好する赤き實を生ずるコケモモ(Vaccinium vis-Idaea)も此邊に多しと雖も其味前者に及ばず、尙ほハヒマツ帯(ハヒマツ群生する高處)より低き處に下れば一種のキイチゴありて味忘るべからず。總て此無人地方の巡回には衣食住の携帶無かるべからず、宿すべき魚釣りの山小屋は主人不在の時に限り之を利用すべしと雖も、其數甚稀なるを以て旅行者は假住居の材料を運搬せざるべからず、天幕又は厚き油紙等即ち是なり之を記すに先ちて彼の小屋の主人を畧記せん。

黒部川上流、高瀬川等は嶮にして職業外の遊覽者殆無く全體天然を存する處多きが爲め川に魚多きは驚く計りなり、職業の釣り師は一日の收穫容易に一圓に達し、時としては三圓にも及ぶ事ありと云ふ、其境遇は數里數十里の村家より半月又は以上の食料(米と味噌、鹽を主とす)を持



ち來りて三疊敷又は其れ以上の小屋(割り木、木の皮、木の枝、芽等を材料とす)を作りて寄宿し必要なる漁具の外に木を切る鋸、食に用ふる鍋、茶碗等の家具少々を以て生活する者なり、其状態は別趣にして羨むべき所あり。

無人地の經歷に要する假住居の材料に最も完全なるは二重屋根の大天幕を立て、中に釣り寢床を設け毛皮、毛布と空氣枕等の用意あれども、是れ等は其量大にして多くの人夫を要すべく人夫を増せば其食料も増加し従て復之を擔ふ人夫を増すの結果と成るべし。

之に反し最も簡單なる者は一丈四方位の油紙一二枚と毛布、外套を用意し又他の雜品の流用を行ふに在り、油紙は天幕の代用を勤めて其用ひ方次の如し。

先づ木の枝を程善き長さに切りて棋盤目に結び附け之に油紙を掛くれば屋

根の片側の如く爲るべし、此片屋根を支へる爲め尙二本の棒を少し傾けて立つれば潰れ屋根の片側の斜面を見るが如し、之にて前と右と左の三方開け放しにて快潤なる雨除けを得べし、其下に草と木の葉等を敷き之を筵毛布等にて掩ひて臥床兼食堂及事務室を生ずべし。

斯の如く粗製なる住居にては高山に於ける寒さは夏も頗る甚しく、毛布にて體を包み大なる焚火にて暖を保つに夜間屢薪を投ずるの煩あり、信濃越中境界の山地には盛夏にも亦殘雪所々にありて甚しきは五六町も雪の上を歩行する事あり。

食料の携帶は米、味噌の外に容量少くして輕き氷豆腐乾瓢等にして川の魚は容易に釣りて殆毎食に之を供ふべし、炊事用の鍋、茶碗等は勿論缺くべからず(最も安全に運搬すべきはカラカ子鍋にして破損の恐少なし)其他草鞋の貯へ等は充分ならざるべからず、山にて葡萄其他の天然物を草鞋に利用する

時は多少採集の時間を失ふなり。

彼の油紙の片屋根、三方吹拂ひの假住居は一見簡單なれども之に要する面積二坪位の敷地は此山間にては容易に善き者を得べからず、濕地は不可なり、大石の上、急斜面、飲水無き所、枯木倒れ木の薪用に供する者なきは不可なり、屋根の骨となるべき木なき所は不可なり、風害水害の恐れ多き位置も不可なり而して此等の不便を避け得べき善き場所は頗少きを以て残雪を融して水に代へ、地面を削り石を除きて新に平地を求むる等の勞は屢有る事なり、然れば宵には軟き敷き草の寢床も夜中には體の重さに壓し附けられ地面の平坦を明かにして所々に思ひ掛け無き石の突出して眠者の脇を押し又肩に當る等の奇事多し、數日此假宿を爲せば後に人家の薄蒲團も其輕きに驚きて寢附惡しき者なり。

此地は高山の冷地なれどもブヨ（又ブトと稱す）の飛び廻りて目と鼻とに亂

入する煩ひは晝間に之を感じ、ヌカガ（細かくして刺す事の痒く烈しき物）は夕に出て來り、蚊も又全く無きにあらず、此特別の地方にて特別の生活を爲せば、雨天の滞在には雨の漏り、水の流れ込みと吹き込みに苦み、大出水には河の涉りを止められ河水濁れば其深さ知れず、危険なるに因て又滞在与爲る、之に因て食物の豫算に恐慌を起し金あるも餓を免れず、特に黒部川の如き大流は出水に恐るべき水量となり、此時に涉りて倒るれば大抵水葬せらると云ふ（腰より下は裸と爲り、是に力を入れて涉り、兩手にて長き一本の棒を舟の棹の如く突き立て、下流より上流に舟行するの姿勢を立て押し流さるゝを防ぐは急流の深所を涉るの妙法にして岸に立て之を望めば涉者皆一生懸命の奇相を呈するを見る）

余が經歷せし道筋の一部分は針の木峠の新道の遺跡にして（マーレーシ氏の日本旅行案内に此線路の事あれども夫れは新道落成當時の景況にして現在の

状態は決して尋常の靴穿き連の遊覽に適せず。大町より立山迄凡拾貳里の道路なるが多く崩れて橋皆流失し人の通行殆無きに至りしは惜むべし、然れども農商務省二十萬分一の地質圖を携へて旅行せば大町より立山に行かずして立山より大町へ逆行するには今日は尙ほ道の跡と小屋の崩れ等を便りとして進むに甚しき迷ひは無かるべし（余は案内者と同行し此事に注意しながら進みたり）又宿所に供すべきは大町より八里程にて達する黒部川筋のダイヤに舊家屋（新道開通の爲め建てたる建坪四十坪位にて太き良材を用ゐて造りたる家）の全潰せし遺材を以て作りたる魚釣り小屋（二間四方位）ありて主人居らざる時は宿泊に利用すべし、其他ハンノキザワ（ハンノキ峠より黒部川に下る澤）には一二の小屋あり、川口（ハンノキザワの上部）の小屋は全く崩れたり同じ澤に於ける牛小屋も亦然り、大町より野口（人家少からず）まで凡一里廣き里道あり人力車を通ず之より

カゴ川に沿て上る事凡一里半の間草苅の馬道あり、（此邊にも小屋あり）之よりカゴ川の河原を歩行して本流のみを登り遂に針木峠の頂上に至る凡二里餘の間には道の舊跡を尋ぬるよりも河原の粗礫大石を踏みて行くを便とす針の木峠頂上の少し前には尙少々の道の形を存せども岩片の崩れ頗甚しくして急斜の高さ數百間にして何の草も無き石の沙漠を爲すが故雨後の經歷は頗困難なるべしと思はる峠の東側には残雪頗多きも西側は稍少なし、峠の頂點には國界の標木尙立つと雖も文字は雨に洗はれて見えず。之より越中領に下りてハンノキ澤の本流に至る、（此點に川口の小屋の遺跡を存す）凡そ一里の間は道の形多く存すれども道の上部は側に岩片の崩れ多き斜面頗廣し、此途上にて富士山を望むべし、尙二里程にて黒部川筋のダイヤに至る間は道の遺跡断れくにして河水多からざる時は之を尋ぬるよりも河原の大石を踏みて行くを便とす。

ダイラにて黒部川を渉る所は平水には深からざれど水勢は頗急にして水の幅凡二十間あり、之より越中澤を上り中の澤に移る道を西黒部峠と名け道の形は善く存すれども其半分程は笹頗深く生ひ被りて不快なり、決して針木峠西側の道の經歷に便なるの比に非ず之より中の澤を上るには道の跡多く存し峠の頂上に達する前後には多量の残雪あり此峠は即ちザラ峠にして其西側の大なる岩崩れの斜面は頗る廣大なり、峠の頂より立山に達する間は道の舊跡不便なるが故に河原の急斜に沿て大石を飛び下り飛び上りて進むべし、ダイラより立山迄凡三里半とすれども歩行には五六時間を費すなり。

針の木峠の山越へも此割合にて長き時間を要すべし、嶮岨の巡回に氣の長きこと斯の如し、此舊道遺跡の外にては余等は一層遅き進行を爲せり。

### 第二 高瀬川の大噴湯丘

今日にては皇國隨一と稱すべき舊時の大噴湯丘は信濃高瀬川の上流に在り此

處に達せんと欲せば大町より葛の湯迄三里(人道あり)行て夫より二里餘の間は魚釣りの通ふ跡あるも所々に危き所ありて葡萄蔓等の助けあるも尙ほ落ちて急流の弄と爲らん事を恐る、之より上は河原の經歷困難ならず行くこと三里餘にて高瀬川二流に分れ其北枝を湯股と稱す、之を上ること三丁程にして舊時の大噴湯丘の跡八個並列して壯觀を呈するあり又其處の水際には現在熱湯を噴き出す無数の小孔あり、此等の丘と孔とは全體三町程の間にて湯股河の北岸に並列せり、此等の新孔には時としてアラレイシと稱する白き小球の石を産す、此石の事と舊時の大噴湯丘、現在の噴湯口の記事は地質學雜誌第六十一號にあり爰には噴湯丘を畧記せん。

凡そ物溫泉中に溶けて含まる、時は其湧き出る所に湯アカの生ずるは鐵瓶の中のガスを見るが如し、此物多き時は穴の壁を掩ふのみならず湧き出る口を狭くし又其縁を高くなすこと古き鐵瓶の口に徴して明らかなり、此道理にて

大なる噴湯處には大多量のガスを生じ又其積み重りて山の如く見ゆるは、恰も火山の灰を積んで其噴口に圓錐を生ずるに等し、又湯アカの流れ出るや湯アカの山の斜面に沿ふて八方に降るごとくは恐るべきものにて高瀬川の噴湯丘の頂上に於る一の噴口も圓錐形を顯せり。

此處の舊噴湯丘には主孔の外に無數の小孔ある物あり、又唯一つの大噴口最大なるは徑五尺に至るを有するもあり、全體の丘の大きさは最大なる者高さ拾尺餘底の徑拾間餘なる物あり、又丘の頂上は平たきもあり小圓錐多く生じて爲めに凹凸烈しき物もあり。

此等の丘の材料は皆炭酸石灰にして粗鬆なるが故に心無き人の鎚撃に遇へば其細かなる構造を破却せらるゝの恐あり、又惜むらくは我等の出生遅くして此等の丘に實地噴湯の盛況を見るを得ず唯遺跡として今日其多くの湯アカの層を見、其奇形を呈して疎なる草原と白色の岩崩れの上に灰色の大丘として突き立たるに驚くのみ。

### 第三 立山温泉と地獄谷

西洋の彫刻に多かるべき千體萬狀の裸像が奇聲を發して放歌する殺風景の中に於て容易に面白き方言取り交ぜの研究を爲し得るは立山の如き大繁昌の浴場なり、固より信州と越中とは交通不便の隣國なるを以て方言も亦異れり、「ヨーの有る處にはヨーが出るわけで夫れでヨーが有りマシ子」と言ふは信州の方言にて反譯せば「硫黄の有る處には湯が出る故に魚が居りマセン」となる、更に越中に入れば稍信州化したる耳には少しも通ぜぬ方言多し、アイヌの比喩を其儘に用ふれば「實に鳥が鳴く様」に聞ふるなり。

立山温泉は固より上等の浴場に非ず、中等室數個の外は大抵皆「長屋」の體なれども其の建築物の大なるは一時に何百人を容るゝに足るかと驚く計りなり、四邊は廣く開きて山側には瀑多く又多くの噴坑を遠望して一種の美景

あり、然のみならず近接せる山側は高さ大崖多く之に横スズの粗き模様を示すは、立山温泉のある所は大なる噴火口にして其壁の廣く圍みて見ゆるなり浴場に給する温泉の湧き元は同所の湯の川の北岸にありて岩の間より流れ出るのみ別に奇觀を呈せず、其温度は頗高くして味は爽快なり、然れども此處には茶に用ふべき水無し、故に浴舎には鑛泉を其儘熱して飲用するのみ浴場より凡そ一里川を上れば熱湯の圓き池ありて周圍三町位、山側の凹みに在り是も又舊噴出口なるべし、此池は青白色の湯にて充され岸には盛んに硫氣を吐く處あり、又底より沸騰するが如く湧き出づる所あり、此池の北岸に美しくして無色なる南京玉の如き玉滴石の少々を産出し、又玉髓並に瑪瑙の粗質なる者の小片此池の傍に散亂す、此處に新湯と稱する浴槽の遺跡あり、此處に来る人は尙一日を費やして立山の粗性草鞋を多く持て浴場より人道を行きて立山神社の峯に往復し併せて其下に於ける地獄谷の硫氣坑を見物すべし、

浴場より頂上迄凡四里の道は始めの間稍急なる登り凡そ半里あり、之より後は小き笹と雜草ありて濕地多き野を行き夫より足場悪しき登りとなり遂に出發後凡二里半にて石多き廣き原に至り浴場より凡三里にてムロドウの一家屋に至る迄一ヶ處も茶屋等の設け無し、唯適當なる所に佇めば西北海面と富山平原を望むべし。

ムロドウの家屋は凡五間拾貳間の堅固なる家にして柱には八寸角位の良材を用ひたれども疊無く障子無く所々に爐を設けて木賃宿屋の體裁なり爰に來り宿する人は夜具と食料を携へざるべからず、余が爰に來りしは九月五日の晴天にして日中に尙少しく寒き感じあり近邊には殘雪頗多し、此日快晴ならざるが故に登山せざりしが頂上の眺望は頗廣くして多の高山を望べしと云ふ。ムロドウより西へ數丁にてミドリノ池、ミクリノ池あり、共に岸高く水深くして元の火山噴出口なるべし、越へて直に地獄谷の奇觀あり、此凹みは長さ

三丁程の間に山側皆禿にして草も無く全體灰の如く分解したる岩石のみなるは硫質の蒸溜にて堅き岩をも腐らして崩せし者なり、此處多くの噴氣坑あり、又經九尺以下の熱き泥池所々にありて、之より湯を噴く高さは數寸より數尺に至る、其沸騰の響、硫氣の霧と一種の臭氣とあるは人を驚かしむ、又銀時計等の忽ち黒くなるも初來の小兒には奇觀なるべし、少しく鑛物學を知る人は爰に於て赤色の硫黃を採り又普通の硫黃の美晶長さ二三分なるを得て土産とすべし（立山破裂の事は富山圖幅地質説明書にあり、立山登山の略案内はマールレー氏の書を見るべし）

上記する所の信州越中の境界以北は花崗岩最多くして此地に屬する鐵鑛、水晶、硫黃等は多少人を呼び寄する基となり、高瀬川筋の紫水晶、葛の湯より三里程の上）には空く大金を失ひし慾望者あり又之を勸めて失費せしめたる狡奴あり。

湯股の硫黃を得んとして飛驒の國より道を開き少く製鍊して忽ち倒れし資本家あり、交通不便なる高瀬川の磁鐵鑛（湯股より黒岳に越ゆる途中にてカラタニの澤口にあり）に資を投ぜんか投ぜしめんかとする者あり、彼のアラレイシの奇形なるを集めて誇る人物あり、黒岳の水晶と柘榴石を採りて鑛物標品屋に卸す人もあり此等は皆格別の業に非れども、此地に於て山林の美と魚類の豊を利用する者は善き營業と爲り、頼まれもせずして營利以外に巡回する人は唯是れ學問の奴と爲る。

### 支那巡りの俗話

余は去る廿八年遼東に於て二ヶ月半程の巡回を爲したれども其時は尙陸軍駐在中にして旅行は便利なりしが支那の紳士等には殆んど會せず之に反し卅年夏の巡回中は支那豪商諸氏の用事にて常に優待を受け（支那官吏には少しく

困りたりしを以て種々の人物に出合ひたるが故に雑話頗多し唯我専門の學術材料を得しこと遼東採集品の多きには遠く及ばざるを歎ずるのみ。爰に綴る所の文は固より有益なる地理視察の學術報告に非ずして唯思ひ出せる雑談なり。

## 上海の滞在

七月六日東京を發し途上異事なく十六日午後上海に着し日本旅店東和洋行の二階に投じたり。

「即」の字 先づ往來に向て種々の物を見れば第一に旅店の前なる川に「即往杭州」と記したる札を掛けたる汽船あり二時間餘も過ぎて尙動かず、後此「即」の字に就て支那通の人に聞きしは「唯今」の意にして支那流に延引する者なりと云ふ。

天下太平の風 往來を行く人は大抵男子のみにして中又は中以上の人と

雖炎天に傘も帽子もなく唯片手にて團扇又は扇にて頭を覆て歩くのみ此團扇には拾圓もすべき鷺の羽根にて造りたる品あり或は煙管の代りに高價なる水煙草の器を携へて行き或は石にて造りたる腕輪を有し、鼈甲の眼鏡を掛けたるもあり、皆長き袖、長き爪、長き辮髮にして落附きたる人相なり、男兒も亦長袖風に動きて手無き人かと疑はるゝは實に太平の風と云ふべし、「支那巡查」も亦長袖長尾の屬にして悠々たり、「黑人巡查」は大にして恐ろしく、「白人巡查」は容貌佳にして體格も長し、此等の三種の巡查ありて居留地を巡回す。

支那人の上等團扇は洋人の「ステツキ」と等しく外出に携帶して格別の用も爲さず唯容體を飾るのみ。

東和洋行の前の賑ひ 彼の「即往杭州」「即往蘇州」の河汽船は出帆の度々爆竹を爲し銅鑼を敲き時としては小銃の如き響き（火藥にて鳴らす）もあり充



分日本人の晝寐を覺ますに足れり又側にある天后宮にも爆竹屢ありて是亦壯んに賑かなり金玉均氏が斃れたる短銃の響も此等の騒ぎの最中にありし事なれば人の耳に入らざりしも尤もの事なり。

往來は人の絶間なく話す聲は叫ぶが如く談話は皆天稟の能辯にして喧し手にて打ち合ふ争は殆んど見ずと雖も通常の話は日本人の口論の如く支那人の談判は日本人の大激論の如くに聞ゆ實に支那人の耳は善く喧きに耐へ又大聲に非ざれば人の耳に入らぬが如し。

始て豪商諸氏に會す 着の當日總代として一人來り余等に鄭重なる挨拶あり鑛産地出張のことに話し及びて余は出發期日の早からんこと、巡回の行列簡單なることを切望せり此夕其招きを受けて豪商諸氏と共に上海藝妓張某の家に宴す(妓寓に行きて飲む日本流の意味あるに非ず)四馬路と稱する繁華の街に至れば絃器、銅鑼、笛等の響にて日本の婦人は頭痛を催す者あらん多

くの茶館にて茶を飲み、水瓜の種を噛み阿片を吸ひ又は大騷ぎの鳴り物入りの狂言(衣裳などは美なり)を見、又は同業者相談を爲すの仕組あり、賣り物の店は燭にて輝き、遊人、見物人、所用歩きは往來に充滿し時々殺風景の大聲と鼻を穿つ汗着物に驚きて見れば妓を載せたる轎夫の叫ぶあり。

又馬車に乗りたる紳士と妓輩は突然群集の人を招く、道より入るべき路次口には何々里と記したり(里とは小路のこと)之に入れば異臭は東京の裏店の如く敷石と家屋の造りは銀座よりも完し、惜むらくは「到所皆雪隠」の制度は支那の臭慣にして破り難し。

「里」の中に入れば所々に張四寶書寓金小紅寓などと妓名を記したる大なる札を掲ぐ、余等は導かれて一の入り口に到れば此家は多くの薪を積み上げたりに是れ薪を賣るに非ずして其置き場に乏しきが故なるべし此邊一體轎夫の供待、下男の奔走其他混雜頗る甚だしく決して箒の目正しく水を打ちて清淨な

るの類に非ず。

家に入りて一小室に至れば爰は幅二間以上長五間以上にて一方には阿片用の臺(二間四方位にして二つの枕と一つの低き盆あり)、一方には妓の寐臺(上等の材木を用ひ彫刻等の贅澤甚し價何百圓かに當るべし、他の壁には妓の雜品を入るゝ大なる家具あり其他小机大なる食卓、多くの椅子等ありて狭き感じは氷水屋に在るが如し、器具は皆高尚なれども掃除不完全なるを惜む。此狭き所には風の通じは勿論悪しく一箇の煽風器にて凌ぐ暑さは尙余等の額に汗の瀧を生ず此内に坐して驚かざる忍耐は隣國なる我々の美む所なり。食時の作法は勿論容易ならざれども、主人は日本通にして先づ支那人得意の「肌ヌギ」を勸む余等は忽ち應じて「シャツ」一枚となれり、席に就けば張秀林とか云ふ一妓先づ水瓜の種を持ち來る。

此水瓜の種の根源は通常の水瓜喰ひの殘物に非ずやと疑ふ之を喰ふには齒

の間にて縦に噛み割るなり未熟練の人は齒の間に簞りて困難す又味も別に無し。

其内に食卓の用意整ひ一同飲食を始む、料理を運ぶ者は色黒き肌ヌギの下男と活潑なる中婆にして別段衣服清淨なる中働きの女なし、妓は新陳交代して入るかと思れば忽ち「アシレイ」(此語は文字なし、文字なき俗語は語學者大に苦しむ)と叫びて出でて行く。

爰に妓と畧稱せしは品位高等にして宴席に侍する藝妓の如き婦人なり其髮の結び方は大抵同一轍にして簡單なるが如く衣服も割合に高價ならざるが如しと雖も髮飾りの眞珠の玉、腕輪、水煙草の器、提口子(宴席に携ふ所の紅、白粉と小鏡を入るゝ器)等の財産は評價頗高し、又足は小さくして善く動けず歩く時は何か不潔を蹈みしが如し、各妓一の從婦を率ひて座敷に來り、從婦は其側に立て周旋す、美の品評に至つては支那と日本は別流なり

彼の妓輩を見れば足の小、額の大、目の丸さ、爪の長さ、(極めて爪長き女は護爪の爲め黄金の管を用ふ)にて忽ち奇異の感を生ず、彼等の務は宴席にて客の後ろの少しく横に在りて椅子に腰掛け一妓一客に侍するが如く時々「金切り聲」にて唱へながら樂器を弄する者あり或は唯雑談する位なり、酒のお酌の如きは彼の務に非ず、其上に掛け持ち烈しきが如く見えて一時間も静座せずして忽に退場す、其從婦の業も亦簡單なるが如し妓に屬する水煙草の器之に附屬のまつち代用紙(竹にて製したる紙を軟く卷きたるもの、一たび之れに火をつける時は容易に消へず之に向て急に息を吹けば火の氣ある時パツト燃へるなり)、并に提口子の三品を運び歩き時々水煙草の器を客に勧むるが如し。

妓は美麗に飾りて悠々と歩を運ぶ時チーンと鳴る物あり、疑ふ勿れ是れは是れ美人が室内にて手鼻をかむ響なり。

全體の奇觀に興じ且つ酒食に満腹を感じたれども主人は尙巧みに食を勧めて止まず御自分のお箸にて肉片を取て余が前に置き下さるは有り難きことなり「四海皆兄弟」の親みも之に至て完全なり、又別に塵溜め、骨容れ等の明き皿も無ければ遺骨、遺介、遺穀の類は總て机上に堆し之れに酒の流れ掛るあらば机上の混雑は容易ならず、萬事新奇にして余等大に喜び一禮を述べて歸る。夜歸宿すれば暑氣蒸すが如しマラリヤの名物を恐れるに非れども腰より上は衣服を用ひ長椅子に横はりて外氣に當りながらにして眠る(以後連日暑に苦み八月に入りてより少しく馴れたり)

涂家滙に於けるフランス人の大專業 上海着の翌日二里程離れたる涂家滙の氣象臺、孤兒院、ヤソ學校、博物館等のある所に赴きヤソ宗教家の大專業に驚き感服し歸る、唯其學校内の書籍室にある支那畫の目錄は奇怪の物なり、架を天地玄黃の千字文に従て分ち、索引目錄は何々誌、何々府誌ならば誌の字

を「言扁」にて探し出し誌の字にて終る書物のみを列記せる所を披て何架に當るかを探す仕組なり。

途中第一目に觸るゝ者は土饅頭を爲せる墳墓が何所とも定め無く散在して良き耕地の妨げを爲すことなり、人死すれば「占ヒ者」が其墓の地を相し「地主」と「占ヒ者」は自然團結して不正の利を獲ること有るべし、固より占ひ者の勝手なるが故に後日鐵道を敷く時の迷惑などは考へ及ばず、又工事の要用あるとも墓地取り除けは大不平なりと云ふ。

上海の城内 其奇を探らんと欲して行くに、大なる道路には敷石の美なること羨まし、隨所撒便の餘臭道路の幅に相當せざる人口の超過、溝の黑色、堀の濁り、神社の混雜、食物の不淨、群集の大聲、風の通らぬ建築法は何百日外人の筆に掛りたるかを知らず之にても傳染病の天然淘汰を被ること無く暑氣に犯されて斃るゝ人も多からず、住民溢れんとして外國永住出稼ぎして

生きて歸り、又は死して棺に入りて歸國するに非ずして外國の土となるの決心を爲す人殆んど無きは實に日本人の考へられぬ珍事なり。

城内の湖心亭は小さき茶樓にして近傍に庭もなく唯藻にて一面綠なる水溜りの中央に建てる不潔家屋にして唯其名のみ風流なり。

城内の炎暑頗甚しきに尙ほ雜沓の中に在て錢を乞ふ本職の乞食（急に始めたる初學者に非ず）には實に巧みに哀れを裝ふ者あり、炎天に仰臥して兩手を合せて拜む者の如きは其の辛苦の甚だしき迎も本邦の乞食が倣ふべき藝に非ず。

商店は間口甚だ廣からざるも貨物を賑かに列べたと賣り手の多人數列びたるは各店一樣にして全體活況を呈す、店頭尙然り住宅に至ては建坪の一坪に凡そ何人の割合にて起臥するか住民の超過は氣の毒の様なり此熱鬧の中に住居して戸外に涼を納れんとするも往來は狭し便臭は到所に滿ちて苦痛は我々

が推察に堪へざるなり。

城を出て城壁外の居留地に至れば道路廣く表道路には臭氣少なく唯支那流の看板、支那品の賣買、廣告の張り出し等を見て珍らしき感あり。

藥の張り札、醫者の張り札には「何々山房精理花柳毒門」の類最多し、又小便無用の張り札には「君子自重在此不可小便違者送捕」などあり「送捕」とは巡捕房(即ち警署)に送るぞと云ふ事ならん然れども此書き出しは大効なし最も有効なるは龜の形を塀などに略畫して置くにあり今の支那人が龜を嫌ふことは實に甚し日本手拭の模様は鶴龜を畫き、人名に「龜吉」「龜太郎」などあるは頗る損なり。

西洋人の店に「ジョンソン」を「莊生」と書き其傍に横文を加ふるすら面倒なるに尙を屋號を支那人の耳に入り易き様「仁義洋行」とか「永昌洋行」などと書くは通例なるが如し支那人の同化力とは此邊に在る者か。

人の家に赤紙を貼りて「五福臨門」「福星高照」など、慾深くして智惠淺き文句を書き附たるは珍しからず中にも「囊中錢勝腹中文」の如きは支那思想を寫して妙なり「子多則百事足」の如きは奇妙なる妄想を顯はしたる者なり、「彼は妾三人子供十人孫廿人あり誠に多福の男」なりなど羨むは屢々支那人社會にて聞く所なり、嗚呼此國人民の蕃殖盛にして食客と貧民と無事の多きは誠に當然の結果なり。

看板に一寸了解し難きは「仕官行臺何々棧」も其一なり、是れは官員宿屋何々樓と譯すべきものなり。

最も解し易きは普通の人の丈にも勝る大字にて「質」と記したるものなり、「百貨俱全、真不二價」の如きも了解し易し但し偽なるを如何せん、定價の書物にても掛け引きあり、一斤何程の品と云ふとも「如何なる秤にて如何なる通貨にて」と問はざれば何の意味も無し、賣り手の秤と買ひ手の秤とは全く異

り、左りとて眞の標準の秤は何地にありと云ふ法律も無し、又貨幣にも粗製、質製、酸蝕、ヤスリ削り、餡入り等の別あり。

西洋人の家の前に「華人不許入」又は「屢常失物、閑人免進」と曰ふが如き漢字の張り札は少なからず實に支那の國體を傷る者なり。

居留地の車夫は汚衣の背に大なる札を附したり其中には車夫の番號、鑑札の日附あり、之に見馳れぬ文字あるは俗用の支那數字「三は八の字なり又捌と書く二は七なり又柒と書く」にして通常の漢字先生には分らず、車夫には約束なく、先方にて下車する時相當と見たる價を給し若し不平を言はゞ叱るか打つの外なし、約束の賃金など言ふも別に効無し。

料理店一品香の饗應 一夕招れて正客となり鄭重にして盛なる宴に會す、西洋料理にして臨時催しの座敷芝居あり、招待狀に「十六日准五句鐘彩觴候、假座一品香、便章恕速」などと記せり、到底説明なければ分らず、便章とは

御勝手な衣物と云ふ事、恕速とは催促を上げぬ内に來て下され、催促は御免と云ふ事なりと云ふ、漢字にて記したる料理の献立も随分奇なり「可果氷已林」とは「コ、ア入りのアイスクリーム」なり洋點は西洋菓子なり、其他之に倣ふ、芝居所作事には「孔明空城計」などあり仕組は知れども役者の文句は皆な「ふし」を附けて唱ふ故支那人にも皆は聞きとれぬと云ふ、道具立ては能樂の如くに簡單なり、鞭を持って歩く人は騎馬の印、怪し氣なる短き棒を横にして其上にて兩手を動すは孔明彈琴の狀を畧寫せるなり、總て衣裳は非常に美しく輝きて極彩色にて目を眩す程なり、囃し方には例の大騒ぎの銅鑼、四ツ竹あり、唱ふ聲も亦耳を破る程なり、又可笑しきは色黒き肌脱ぎの男茶碗を舞臺に持ち歩きて時々役者に飲ませるなり、大體目新しくして大に興に入りて歸る、役者と成て出でたる者には名妓も交り居りて纏頭其他にて一切高價なる盛んなる催しと思はれたり、此日の料理は西洋風なれども顔をふく熱き

手拭は尙存す(餘程此手巾は大切と見えたり)  
 上海にて旅の用意 先づ支那人の特性を研究し置かんとてHolcombe's Real  
 Chinamanを熟讀し又支那政府出版の浙江省の切繪圖を見、イギリス人の博物  
 館にて支那の博物標品を見、又除家滙に赴きてフランスの學校等を見たれど  
 も實に格別なる學術の新知識を得ること無く唯左の如き支那人氣質を實見せ  
 り。

第一 容 體

官吏の肩書きの長きは驚くべく高官の外出の行列、血氣盛りの人の駕籠に乗  
 ること、絹衣服の長袖、下男の数多きこと、飾りの仰山に美きこと、閣下老  
 臺等の尊稱の濫用、貴人に對する、敬禮、親孝行の芝居(父母の葬式に「泣  
 き女」の行列を加えることも其一なり)、不自由を忍んで石製の厚き指輪をは  
 め、目の玉の何十倍かに當る大なる水晶眼鏡を用ふる等は容體を貴びて費用

を後にする適例なり。

第二 奇なる性質

炎天に恐れずして傘も帽子もなく、道路に充滿する支那人も俄雨には洗ひ去  
 られて道路無人と爲るは、一の奇觀にて雨具の用意悪しきは實に不思議なり、  
 美の觀念はあれども芳香の觀念は無きかと云ふに、女の髮飾に茉莉の花の行  
 列を用ふることもあり、料理の傍に佛手柑を置きて香をかくも亦妙なり、(然る  
 に道路は便臭常に絶えず是れ公共心の少きが爲めなるべし) 神信心と迷信の  
 盛んなる事は、餘程進歩せり是れも亦占ひ者、神官等の營業に巧みなるを稱  
 しては如何、支那人は多く眼前人に冷罵せられて怒らず自ら違約するを何と  
 も思はず、又保管せし者を失て謝罪せざる人は決して少しとせず、教育論と  
 愛國論は殆んど聞かず支那にては人生第一の望は「錢」にして其次は生命其次  
 は我家族のことなるべし、國家と云ふ語はあれども意味はなし、誰なりとも

錢を携へて來る者は敵に非ずと思ふなるべし、之に準じて商業の團結力、大商人の信用の如きは世界に轟く所なり、外國商店にても支那の地には支那人の番頭の如き者（コンブラドル）ありて我商館と買ひ手の間に立ちて周旋し、同時に己の利益を爲すものなり、小き買ひ物に下男を用ふれば一圓に何程かの手數料（うはまへ）をはねるが規則なり（若し之に立腹して自から買ひに行けば却て高く買ふなり）富豪の食客下男は之にて善き株を爲すものにして下男は主人にはね、主人は地方官よりはね（地方官も亦御用金を命ぜざれば迎も生活出來ず、謂ゆる養廉俸はあれども之れにて賄賂を思ひ斷つべからず）地方官は政府よりはねるなり、世の中に嘘なかりせば支那人は最も困難すべし。

第三 謂ゆる禮義

人の困らぬ様にするを禮義と思ふは博愛の主義なれども支那の禮義には種々

の奇事ありて迷惑多しと云ふ、然るに人の前にて臭き砲發を爲し座敷にて手鼻をかむが如きは格別の無禮に非ざるが如しと聞く。

第四 經濟と忍耐勉強

最も支那に不釣合と思ふは字紙を焼き棄ることなり「敬惜字紙」と書きたる紙屑籠に字紙集まれば堂の傍などにて焼棄るなり一體に廢物利用は能く進歩して道に充滿する便臭は何にも利用せざれども藁の切れ、繩の端なども善く拾ふと見え道路の上に落ちたるは餘り多からず、食物の殘品利用法も亦進歩せるが如く故に街頭を歩く犬は滋養を缺きて、瘡せたる者多き地方あり、又忍耐と勉強は有名なる者にして之を勸むる者は錢に在て、名譽には非ず、又學問と云ふは大抵文章のみにして行に在らず、自然の研究に非ず、博物學、物理化學等は末技として賤め、宇宙萬物は皆陰陽と仁義の道にて説明するが如し（近頃に至り學問吟味に實用の學問を入れたる由）尤も以前より時務（時



務とは數學化學歴史政體論地理學等凡て平日入用の學を指すの小冊子は種々出版せし者あり、又今日は上海に數種の専門雜誌あり。

### 第五 時 間

時間じかんは有れども一時間と二時間とは大概同じ様なり、凡て精密は支那の禁物なり、天秤てんびんに確たる法律ほつりつ（實行の法律）無く貨幣に簡單なる加減乗除の規則無く、里數りすうを云ふに四捨五入、一捨二入又は全く出放題多きことは初來の人を驚かしめ、支那人は却つて之れを利して勝算しょうさんを爲す者なり、拾文錢しつぶんせんの大にも種々ありて狡奴かうどは錢を鑄造して大錢百個の元手にて小錢三百個位に作りかへる事あり、此謂ゆる小錢は通例排斥せらるれど徑何分以内を排斥すと云ふ法律は勿論無し、時と場合と氣長の討論にて隨分善く通用することあるが如し、又錢せんに相場あり弗ふを拾文錢しつぶんせんに換ふるに今日の一弗は昨日の一弗よりも多く又は少なしと云ふは通例なり、故に「明日午前何時何々何斤價何程にて賣渡す」と云ふも固より大畧たうりやくのことにして時と金と共に浮きたる話なり。

### 第六 了解の力

精密せいみつは考の中にあらずして多分たぶん、大丈夫、事に因れば是非共は大概同じ位の價値かちあるが故に自家撞着は常の事なり、語るに大聲を用ひ手眞似まねを爲して、大騒おほさわぎなるも思ふ様善くは意味通ぜざるが如し、余後に通辯つうべんを用ひて大に其談話の長きに過ぐる事を感じたることあり、或人支那人の神經は少しく感じ悪しと論じたり、臭氣暑氣きうきじゆきの嫌なく如何なる所にも善く安眠するが如きは鈍神經どんしんけいの賜に非れば羨むべき忍耐力と賞すべし。

### 第七 國 語

支那音の眞似し難きは支那人が外國語を學ぶ事の速かなるに照して善く人の敬服する所なり、又外國語を奇妙に改造して巧みに流暢に轉るは感服の至りなり、其例次の如し。

務とは数学化学歴史政體論地理學等凡て平日入用の學を指す。の小冊子は種々出版せし者あり、又今日は上海に數種の専門雜誌あり。

第五 時間

時間は有れども一時間と二時間とは大概同じ様なり、凡て精密は支那の禁物なり、天秤に確たる法律(實行の法律)無く貨幣に簡單なる加減乗除の規則無く、里數を云ふに四捨五入、一捨三入又は全く出放題多きことは初來の人を驚かしめ、支那人は却つて之れを利用して勝算を爲す者なり、拾文錢の大にも種々ありて狡奴は錢を鑄造して大錢百個の元手にて小錢三百個位に作りかへる事あり、此謂ゆる小錢は通例排斥せらるれど徑何分以内を排斥すと云ふ法律は勿論無し、時と場合と氣長の討論にて随分善く通用することあるが如し、又錢に相場あり弗を拾文錢に換ふるに今日の二弗は昨日の二弗よりも多く又は少なしと云ふは通例なり、故に明日午前何時何を何斤價何程にて賣渡す

と云ふも固より大畧のことにして時と金と共に浮きたる話なり。

第六 了解の力

精密は考の中にあらずして多分、大丈夫、事に因れば是非共は大概同じ位の價值あるが故に自家撞着は常の事なり、語るに大聲を用ひ手眞似を爲して、大騒ぎなるも思ふ様善くは意味通ぜざるが如し、余後に通辯を用ひて大に其談話の長きに過ぐる事を感じたることあり、或人支那人の神經は少しく感じ悪しと論じたり、臭氣暑氣の嫌なく如何なる所にも善く安眠するが如きは鈍神經の賜に非れば羨むべき忍耐力と賞すべし。

第七 國語

支那音の眞似し難きは支那人が外國語を學ぶ事の速かなるに照して善く人の敬服する所なり、又外國語を奇妙に改造して巧みに流暢に轉るは感服の至りなり、其例次の如し。

Too much people, no can go; you go topsan, looksi he and tell he; me  
 no ashi, What time me go Shaghai. Oh! masi. Chon-chou(餘り人が居  
 て歩かれぬ。汝は二階に行きて彼に會て彼に言へ。我は知ず何時に  
 我は上海に行けるか。ヒーどうでも悪い食事(やう)

馴れぬ間は少しも分らず少し馴るれば文典構はずして誠に輕便なり、又支那人が洋人と日本人の名を短くして分らぬ様にするは甚しく神保を shengo と短縮し小田切を tien と短縮し Williams を維廉と書きて、Willen に變ずることあり實に不都合なる誤解の基なり。

寧波奉化象山の巡回

東京に於て某君の指定を受けたる巡回線の設計は風水(方角先生の言)の都合にて或大地方を否決せられ、行きても石を敲きても穴を掘りても天神地祇、鬼神妖怪の崇り無き地方(某君が一度通行せし所)にて強盜追剝の憂も無き地

方にのみ限られたり着の日より凡一週間の後左の電報を見る即ち案内人某は其住地より起ちて直に着することとなり之と同行して出發す。

0402 淮 0577 + 0046 九

1123 夜 0320 動 6500 身 0665 可

0494 可

右電報に數字の行列あるは其傍にある漢字の番號なり、カナと云ふ重寶なきを以て電信局にては一字づゝ其番號に翻譯し數字にて發信し向ひの受取局にては其數字を見て元の漢字に直すなり。

二十一日午後「北京」と稱する外と車の汽船に乗る、通辯として同行の支那人某はイギリス語と日本語に通ずる利潑の青年なり、此船の上等室は舳の方にありて支那人の客を謝絶せり、(船の持主はイギリス人にして他國に在て斯の如き振舞を爲すは傍若無人なり) 其趣意は船の進行の時臭き支那風が上等

室に吹き込まぬ仕組なり上等室は清潔にして阿片の香等は少しも無く、給仕人は支那人なれども是亦清潔なるは悦ぶべく、多少半成のイギリス語をも解す、五時過ぎ出帆して翌朝六時頃寧波に着し先づ西洋料理店に入る、一通りの支那家屋にして室内に二つ枕の阿片臺あり、壁に見えたる貼り紙に「承蒙賜顧、現金交易」とあるは御尤なれども「衣帽物件貴客用小心、倘有遺失與本館無語」とは少しく冷淡なり、食後城内に行き古き壁に上る外に見物すべき者なし、初めて轎に乗り汗を流して或る家に憩ひしに轎夫大聲にて議論を始む（上海車夫と同じく賃錢に満足せずして尙ほ請求するの狀なり、此時之を摘んで巡查に渡すべき仕組は居留地以外には無し、静まりて歸る迄大聲多辯の競争を爲して轎夫と争ふなり、又之を打て追ひ拂ふと云ふことも爲さぬ者と見ゆ）、此争論を聞きながら暑き顔拭き布（手布）と熱き茶を勧めらる、熱き時に熱き茶を飲むは味も善く健康にも害なきが如しと察す。

余嘗て支那人が水を飲まぬを賞する人に會へり、今上海地方に來り見れば遼東の山間の如く良く澄みたる水を見る事なし斯の如き濁水ならば冷水にて飲まぬとも決して感心すべきに非らず、飲まぬに非らずして飲めぬが故なり、又愈々渴に苦む時は半濁水を其儘に飲む支那人をも實見せり。

此邊の地圖を開き見しに運河は蜘蛛の巢の如し實に支那の商業の盛にして大なる富豪のあるも尤なり。

彼の料理店の雪隠には頗る簡式あり一方の縁の少しく厚くしたる肥桶に直接腰掛けて放つ者あり、初來の人には危険なるべし、寧波奉化等にて此最略式に次ぐ奇式の者を多く見たり、道の傍に何の掩ひ匿す者もなく屋根ある物置の如き所に底抜けの椅子の如き者を置きて之れに腰掛けて爲す者なり、前より見れば單に椅子に坐して往來を眺望する者の如し。

寧波より小き西洋形遊船（寢臺二つあり余等の爲めに供す）と外に大なる

木船三つにて本流を登ぼる荷物頗る多く、同行は支那紳士と其隨行者並に同伴人合せて拾數名なり、其上等連の陸行には籐にて造りたる椅子に棒を通す様なる新案の乗り物六個程ありて之をも船に乗せて行けり飲料水迄も備はりて船遊びと思ふ程に充分なり。

途上の所見格別の事無く所々に大なる石橋ありて眼鏡橋にはあらざれども大なる長き石材を利用したる壯觀は日本の小細工の類に非らず、又所に因り橋の上に屋根ありて其中に休息所等のある物あり、奇なる案と感心せり、兩岸は田畑善く開け山は通例河岸より遠く、景色に面白きことなし、又所々に見る涼亭とは道路にある小屋（煉瓦造りにて三方閉め切りにて窓無し）にして如何に考へても「涼」とは思はれず或は炎天に奔走して後此中に入れば割合に涼なるの意か。

河は次第に淺くなりて船進まず即ち途中にて太き竹にて作れる筏に乗り替へ

て行く、(筏の道中凡日本の三里位なりし)

太き竹（徑凡三寸）の長さ二間位なるを切りて筏にしたるものにして前の方は水のはねるを防ぐ爲め少し上に向て曲れり、之を二つ續ける時は隨分長き筏となる。

二十三日の晝前に小皇廟（寧波より凡日本の二十里）に達し晝食す「先生英國人」と問ひし者あり余等は此位の珍らしきなるが故に余等の休息所は空前一面肌脱ぎの老若にて充滿す、追へども追へども新陳交代頻りにして住民の數に不足なき國の勢は格別なり。

是より新案の乗り物凡六個と田舎に行はる、竹製の駕籠（釣り臺と名くべきか）凡四個にて我等一體の者を運ぶ道路は始の方は廣く二人立ち位かそれよりも太し、後は岩の山の急なる上りとなり此日の夕刻に棠溪の龍王堂（銀鑛脈あり）に達し一泊す（小皇廟より五里位）

余等の爲めに屋内の修繕等あり萬事都合善し。  
二十四日鑛脈を見る、此所前以て石工數名來り鑛石の素人試掘を爲せり、近邊の者古き手拭様の者に一片二片鑛片を取りて持ち行くは細かき慾と知られたり、此邊の地主に對する土地讓受の談判は大聲にて賑やかなり、此邊の鑛脈の實驗終りて後竹藪（太き竹のみ多し）の中に納涼すれば人眞似して他人も我傍に集るに困難せり、又山間にて道路に石を敷きたる所多く、之には敬服せり。

二十五日此所を發し下畢住（道程凡そ五里）に赴き所々の鑛脈を見る、途中竹紙の製造（竹を煮て水に浸し軟らかくたゞきて其纖維にて紙を作る）屋根附き橋（前に記す）の奇體、田舎の寺小屋の賑ひ（大聲にて朗讀する事經を讀むが如し）等を見亦途上或る神社にては我等の晝食の有様を土民に見物せられ、見たり見せたりして一々興に入り又暑に苦しみて午後は雨に遇ひ駕籠に

乗る駕籠屋雇入れの談判容易ならず。

此時同行は支那人二人我等二人先づ何程づにて何挺持ち來れと命ず、暫く待たせて後人なしとて斷わりに来る、即價を上げて復命す、暫らく待せて又斷わりに来る更に價を上げんとせしに談判調はず仲に入る男ありて始めて決着す、（價は初價の倍程に至りて此時仲人せし人は多少の手数料を得たるならん）、此夕約束の地に着して粥を駕籠かきに御馳走せりと云ふ、翌朝亦大議論ありて彼等亦賃金の増しを乞ふなり、別に巡查もなく壯士もなく打て拂ふに道なし、摘んで棄るの手だてもなし、支那の旅行は困難に非ずや（防盜の器械、監守盜の處分法、其他財産の安全を計る道は誠に少くなし自家撞着、違約の如きは珍らしと思ふ勿れ）

二十六日竹の筏にて先きの小皇廟に至り之れより船に乗り二十八日早朝寧波に歸る。

## 寧波と象山の間の船中

流石は豪商連の起業せし鑛山の探検なれば種々の便宜あり、長さ二十間程の官船に便乗して象山に赴く、余等二名の外に支那紳士従僕、人夫等合せて二十名以上の一體となりて乗船す荷物は多量の衣服其他の要品、不用品、飲食料、洗面桶、土瓶皿鉢に至るまで積んで山の如し、二十九日午後出帆して象山に向ふ。

此船は新造にして未だ支那の不潔に染む事なし唯々支那風に造作を爲せしのみ、船の兩側に同じ看板あり、「巡洋捕匪」、「除暴安良」と記せり文字の上の方に虎が口を開きて恐ろしく馬鹿らしき姿を附す。

甲板の中央部は船長等の晝寢の間一つ、此處に阿片を呑みさうなる二つ枕の高座あり其傍に關羽の青龍刀の如き物を立て別に小銃數十挺餘あり、舳に行けば速射砲一つありて「何程磨くとも兎角鏽る」と稱す。

夕刻に至れば一發の小銃と一吹の喇叭を聞く、日暮れて後更に一回小銃を放つ何の爲なるかを知らず、船には美しき旗あり刀劍あり此船の軍事組織は十分なれども船中別段に武人風の體格を見ず。

夜明ければ乗組みの人一回の掃除を爲し朝の食事の用意を爲し其内に晝飯の料理等ありて萬事終りて午後に至り暑氣烈き頃になれば甲板の上は行き倒れの晝食姿種々ありて雑踏す、我等の上等連は美しくしき所にて眠り、船の乗組の連中はアンペラを敷きて靴に枕する者あり、板の上にて枕無しに肘を延ばして眠る者あり。

日本に見られぬ風俗多し苟も五尺以上の長さの所あらば巧みに眠り得るなり、船長其他一同平服にして暑き時刻には袖無し襦袢或は肌脱ぎとなる、土瓶の口より主人の茶を飲む男あり人に背を向て臭砲を打つ人あり、船室の上の明り取りの板を水平にして其上に泥の足にて乗て眠る人あり無禮講にて面白し。

此泥足の晝寢所を別段洗ひもせずして其上に皿小鉢、箸、茶碗等を直接に置きて食事することあり、我箸は汁にて濡るゝも別に置き場なければ此謂れある板の上に置き「ちりれんげ」も亦然り、船長が深切に己れが箸にて取て我が前に置きて呉れる肉片も亦直ちに此板の上に在り、彼の泥足の接する所即ち不潔とは今更云ふも益はなく之のみを咎むるは見識狭し尙料理掛りの幕内を覗き見よ。

料理の敷と飲料の整頓は不潔の風に似ずして完全なり、食後の茶、西洋菓子等も用意ありて我等頗満足す、かくて上流の者一同満腹して去れば先きの我等の給仕せし不潔衣服の連中が我等の箸と茶碗を取り其儘其所にて食事を爲す上下の隔無く和氣船に満つと云はんか此等の第二回採集を終れば食物の佳味は跡を留めずして食事せし甲板の上は遺骨遺殻にて混雑す、時として茶碗を杓子の代りに用ひ、洗面桶に粥を入れて來ることあり。

甲板の上雜物の山を見れば靴と帽子の隣せるありパンと草鞋の同居の如きは到底避くべからざるを見る。

兩便所の構造には洋式あり「手摺り形」(手摺りの様なる者に腰を掛け其内側に大便するあり)の略便所もあり其床に板を張らずして鐵の棒を渡せしは小便の湖水を作らぬ豫防として妙なり、此奇式の便所には同時に三人位は列べるなり、故に普通の日本人に適せず。

余が寢所は甲板の下のサルーンにて清潔意に適せり、勿論暑中なれば身體懶惰なるのみならず旅行の日取りは續々變化し「即發」などの語には意味なきを以て遂には心寬かに遊び居れり。

船は三十日の夕に象山縣の岸に着す直に上陸して近傍の鑛山地を見んと言ひしが「盜賊多き故見合せ」と言へり、船の小銃と速射砲にて撃てば如何と言ひしが此船は格別戰爭の眞似を好まず。



翌日船より上ぼり銅鑛脈の産地を見る我等の總勢は凡そ三十人なりしが一人の老婆の無理の故障に妨げられ格別の實見を終らずして去る。之より轉じて西に赴き石浦と稱する所に碇泊し之より甯海に赴かんとせしが或る故障に因て果さず寧波に立ち歸り之にて豪商諸氏の用事を終り同日上海の旅店に歸宿す。

## 再び上海の滞在

都合に依て暫く旅店に居る間に日本領事の宴に招かる此日の客は上海の貴顯某大臣其他高等官のみ宴中の奇觀はお供の連中が戶外に立て食堂を見物するにあり、又支那官吏の饅頭笠に赤毛を付けたるは一寸面白く、長き外套の薄衣の帯に種々のものをぶら下げたるも面白し、フランス語の上手なる男もありイギリス語の上手もあり、爪の長き手にて巧に肉さし等を扱ふ男は感服なり、皿の中を矢たらに掻き廻すは大臣殿なり、アイスクリームを少しも食

はぬは純粹の支那人連なり、某貴顯の書記にして何やら實のなき事を列べる男ありて一寸面白し、然れども思ひしよりは支那禮式の芝居掛りを見ずして歸る。

其後尙ほ閑日あり一輪車に乗ることを試み二三回田の中に落ちて歸る、幸に水少なくてして損害を蒙らず。

一輪車とは大なる輪を一つ附して一人にて前の方に押し行く車なり、之に乗るものは荷物又は下等人に限るなり、餘りに面白き様なるを見て一回之を試む、此車は公共心少なき道路普請の考なき狹道悪路にて溺潭の難ある所にも用ゐらるゝものなり。

## 長江の道中

上海の某貴顯半官半私の目的にて我等に向ひ九江地方の石炭實視を托せり、因て十一日に至りて招商局の汽船（赤地に黃の玉の旗を掲げたる半官の汽船

會社の船（江浮號）寧波に行きし時の船よりも大にして善し）に乗り込み貴顯の配下の人々並に其の從者等と同船し始めて左の書を讀む。

鄭官應氏（官の字を觀と書くことあり隨分勝手なり）の盛世危言（此人は今上海の高官にあり開化せる老人にして支那氣質は少し、此書は其大に時勢を歎じて自ら支那の新聞紙上に投書したるを集めて一書となしたる者なり、或部分は寄稿の時代古しと雖も旅順の敗軍等を論じたる所は材料頗る新しく、實際尤もなる立論にして説く處精細なり、數字にも曖昧の者少なく、支那の古代の開化、古代の倫理等を思ふて今日日本と西洋とに輕視せらるゝことを考ふれば今の學問は唯文學を主とするの結果に外ならずと論斷し、支那に殆ど無き女子教育、技術學の學位、普通教育、理學の獎勵、精細なる貨幣制度、圖書館、共進會、郵便法、備考、道路修繕、の事に至るまで一々詳論せり。書物は半紙二つ折位の大きにて厚さ凡そ二寸程の唐本にして文字は大なり、

學校の部にては我帝國大學を論じたる所の材料は古けれども各分科大學の専門の區分等迄委しく列記しあり、又東京にて屈指の學校名は皆具り一見して支那人の著書とは思はれぬ程なり、唯少しく可笑しきは女子師範學校の條に「於體操時……或倚樹聽蟬、或穿花撲蝶、或馮欄覓句、或臨池垂綸、天趣盎然、了無拘束」とあり是は眞の支那文なり日本の女生徒は斯の如き優美なる性質無し。

船中の笑 南京に學問吟味あるに因り同船にて出張する多くの支那の「讀書家」あり之に向いて「井戸の水は低きより高きに就くの理由は如何」と試問せしに「各得陽氣則上騰」と答へ雨の源因を試みしに「樹吸土氣而蒸成雨」と云へり、此位の初等教育缺乏にして尙ほ及第するは文章の上手なり「行有餘力則可學文」など云ひしは昔の事のみ今は無學にして不品行にても文章を以て世に立てるなり、然れども此頃學問吟味規則變れりと云ふ、此等の奇

答を爲せる人物は單に無學にして害なきも中にはイギリス語を轉り少しく生意氣なるものに逢へば忽に「朝中大老皆係少時從文章出身、在下者亦日從孔孟無用學」など、筆談にて論じ、誠に日本に於ける明治の初年の半學者も斯くありしかと思はる。

同行の一商人あり、此の男支那流のイギリス語を談ず之に彼の慷慨の書物なる盛世危言を示して之を讀めと勵めしに彼大に笑ふて「我不做官」(私は役人でありません、其故讀まずと善い)と答へて去る、實に尤の事なり支那の商人に國家などは耳にも入らぬことなるべし。

#### 彭澤の着船

此地は九江より少しく下にありて城壁にて圍みたる山側の小都會なり、十九日の夜汽船此處に達して汽笛を鳴らす、岸には木船より鐵砲の如き響あり、我等と同行の支那官吏を奉送するの意なるべし暫くして傳馬位なる木船來り

て余等を之に移す、其の中に赤錆の鐵の大砲あり、陸に着船すれば、復陸にて小銃の如き音あり、驚きて見れば多勢の見物人あり大なるブラ提燈、緋羅紗を着て刀も何も持たざる新兵(しるし半天を脱げば人足と區別なし)、住吉踊の傘、(貴人の行列の中の物)、上等の轎(三人かつぎにて乗りて安全)五六個ありて吾等を迎ふ(提灯には候補有)隸州正堂、城守營巡查等の文字あり、其の骨は地球儀の緯度のみの者ありて、傘のやうに縮るもあり又は紙屑籠の目を粗くせしが如き者あり)新兵なるものは衣服こそ美しけれ別に武器を持たず、日中は扇を開て顔に當て日をよけて歩き、又割合に長き煙管などを携ふ、其の用事は唯高等官のお供なるべし、背には黒き天鵞絨を字形に切つて「何々城守衛新兵」と縫ひ付けたり。

我等は轎に乗るに乗方は到底支那人の如く巧ならず中にて動けば落されんかと思ひしが三人かつぎの轎(普通は二人なれども)なる故釣り合ひ好く覆没

の憂少なし、見物人は「東洋鑛師來」(日本の鑛山技師が來た)と叫んで轎中を覗ひ四ツ角に來る毎に長棒の轎は見物人を押退けて進む騷ぎは誠に火事場にポンプを運ぶが如し。忽にして五體に響く音と共に不器用に轎を下ろす、我等出て見れば入口には青龍刀を建て、恐ろしく見えたる所なり、是れ郡役所の如きものなるべく、美しき模様の上着を着たる役人出て、迎ふ、此人余に向て西洋流の握手をなし愛嬌笑ひと手真似にて我等を導きて大なる廣間に通ふす、天井は高く、柱は太く、柱の彫刻と塗り方は有味に非ざれど唯美し。人ある所必ず枕あり、役所にも船中にも、料理店にも、休息所にも枕なきはなし(余が見たる限にて之を言ふ)此役所にも客間と見えたる此大廣間の一方に小高き所ありて此所にも枕二つ、何の爲なるか若し晝寢の爲に非ざれば定めて之れ阿片の爲めに用ふるならん此高座の上の所に「悅親戚之情話」と書

きたる大額あり、此所陶淵明の在任地なりしが故なるべし、軒に掛けたる赤布の燈籠は東京の小供の廻り燈籠の如く又妙に透き通る材料(角の如く見ゆ)にて作りたる楕圓形の燈籠には南京玉の飾り目うるさし、椅子と机に大理石を挿みたる飾りなども安價には非ざるべきも皆同一轍の頑固無味の形は我等見るに堪えざるなり。

色白く虚弱なる爪長き男(知州なり)余に話し掛く余は忽にして行き詰ることを恐れ「不懂」(分りません)と曰て睨み合ひとなる(此地の土語は遼東にて通用する者に類似す、漢口にても亦然り、余が半熟支那語も屢用を辨じたり)忽にして同行の高等官等皆着し、訪問者もありて舞臺は純粹なる支那禮式の茶番狂言と替り、立禮の奇體、見送りの時にある鳥の羽ばたきの如き身振りなどして面白し、又役人は「楫」をしながら、ちよつと轎に乗り、腰が掛ればヤツト曰ふ轎夫の叫と共に轎は人の肩に乗る此等の呼吸も中々可笑

し、暫くして後荷物も着す、其の多きことは驚くばかりなり、又人足、お供、見物人等の群集する有様も見苦し、此中にて我等兩人の日本荷物の少量なるは其の比を見ず、此日の接待は、蓋をしたるまゝにて飲む支那茶の外に蓮の實の甘き汁等にて簡單なりしが下部屋の騒は非常なり、荷物の片付けのみにても大仕事なり壁に貼りたる役割りに「護轎誰々何人、何々、何人」と書き出したるにても奉迎の仕掛の無益に大なるに驚く。

我等は眠に就き翌朝役所の中を巡る、或所に「退歩」と書きたる額あり此二字の傍に「余性忠恒以退少爲安樂法」と記せり場所柄にて善き文句なり。

其中に木船の用意（傳馬位にて屋根あり）調ひ七艘にて石炭産地に赴く。

同行は我等二人の外に高等官吏三四名之に要する轎三四、轎夫何人お供何人（新兵數人を加ふ）雜品何人前と數ふれば大なる七艘も既に満員となる筈なり、無用なる飲料の多き、禮服、禮帽の箱、轎の棒の長き鶯の羽の團扇など

贅物眼を遮りて混雜頗甚し、命令は固より統一を得ず、食物船に別れては空腹を歎き、二艘衝突しては相罵るの聲、兎角靜穩を缺く、俄の雨には船夫も誰も皆船の屋根の下に匿れ、炎日の船を焼くも別段日除けの板をはめる氣轉もなし、人の目を忍んで雜品を盗む船夫あり、用事もなきに赤き大なる名刺（日本の最大名刺の數倍以上）を持して訪問に来る俗吏あり無益の混雜の中に時刻過ぎて有益なる調査は思ふ様に出來ず。

陸に着きて地を踏めば足弱き知州は二人の腕を便りとし他の一人は後より傘をさしかけて歩く有様は病人の散歩を見るが如し、所謂石炭の處に行けば何年前試掘せしか、此近傍に石炭ありや等の質問は到底信すべき答を得ず實に謠にて固めたる世界は言葉に信用なく時としては我等二名の日本人は夢の心地にて茫然たり、或時は六時間以上も船を進ませて「迎も容易に其場所迄行かれず」として引返し、又或時は「一の石炭の産地も一時間の内に二三回移

動し（瓢箪餘の談話にて前説撤回、自家撞着は常の事なり）遂に何處に在りとも分らずして終りし事あり、（通辯人の外にイギリス語を善く解する高等官一人あり此人に向つて種々談話せしに更に取り止めもなし）、或所にては新煤洞など、廣大なる地名を附しながら連も石炭と思へぬ土の出る所あり、又政府雇の或ドイツ人が堅穴を掘りて見んと云ひしとか評判せる所にては何人の愚と雖も左様な無益事業は爲されぬと思はれたり。

一體に格別調査の結果もなく一二の箇所を除けば全く反覆極りなき話の中に何にも無き所を引廻されて歸りしは、此九江地方の石炭産地の出張なり（先きの豪商諸氏の鑛山に赴きし時の如き優遇も無く、又鑛産地の有り場曖昧にて困却せり）善き程の處にて汽船に乗り移り例の銃聲三發と美しき彩色の旗に送られて再び上流に進み、九江に至て同行の高等官等に別れ我等二人と支那人二人のみは更に上流に遡り二十三日漢口に着す。

## 漢口の滞在

先ず高官某の添書を持して同所の製鐵所<sup>せいてつじょ</sup>に赴き鐵鑛の産地に赴くことを議す、便乗すべき船は二つあり一は修繕中なりとのこと故「然らば明日來るべき船は慥に來るやと問ふに「實は修繕中の船も修繕は濟みたり他船來らずとも之に乗つて行かれよ」と言はれ、口前の善しきに返す言葉もなく、其中に種々不快の事もあり、製鐵所を見終つて上海領事の送金を待ちながら尙ほ一日漢口に滞在し、晝夜の別なき酷熱（此地は海より遠き故夏日の暑は烈し）に身體も弱り格別の見物も爲さず、西洋旅舎の堅肉、支那官吏の冷遇、居留地以外の臭氣と熱鬧に倦きて二十五日此地を去り二十八日上海に着し九月三日長崎に向け上海を發す。

## ボル子オ外二島巡見雜話

書齋の午睡必ずしも安全に非ずして、熱帯の獨り旅も常に危険なりとは云ひ難し、オランダ領の東インドは全體野蠻の地と云ふに非れば我より行きて見るべき所少しとせず彼より移して我に應用すべき物頗多し、唯恨む我日本國の貧にして資力少く、我等の體力弱くして勤勞に堪へざるを。

『天下太平』は古き夢となりて今日は『世界大亂』の時代と變はり、智力と體力の優れる者は其慾を逞ふし猿に似たる劣等人種は益悲境に沈まんとす、此活劇を見んと欲せば遠行するの必要なし、唯拾五六日を費してシンガポールに赴けば即ち足れり、又ジャバに赴きて其土人の生活を一見せば感じ悲むべき事頗多し。

先づシンガポールに行きて見よ、一片の銀貨を海中に投ずれば争て之を水中に獲るを以て業とするマライ土人あり白牛の荷車に御者をなす色黒きタミル

人あり、小家屋に群居して暑を暑とせず勉勵して富を争ふ支那人あり、大家屋に白衣を着し扇風器に暑を忘る、西洋人ありて、皆其屬する所の人種の地位を代表せり、之に對して同地に滞在する日本婦人と日本男兒は何を爲して生活するや、唯二三の大會社等に在る者を除きては、爰に其生活を記載し難し。

慷慨家宜しく行くべし、商業家亦行くべし、政治家、工藝家、詩文家、兵法家、皆一たびはシンガポールより東インド地方の巡見を試むべし、興味多き事なるべし、然れども、彼地の景況は未だ本邦人に通ぜざる所頗る多きを以て、左に余が旅行中に感じたる特異の事實を列記して後の旅行者に示さんとす。

余が出張は卅二年の始より喧傳せし謂ゆる「ボル子オ石油の無盡藏」を視察せんが爲めにして、農商務省の囑托に因り、卅二年六月より十月に至る凡そ四ヶ月間の旅行なり、復命書は商工局の報告に出版せられ、三十二年十二月印刷、又大略の報文は地質學雜誌第七十四號(三十二年十一月)にあり、

又ジャバ旅行者の注意も同誌同號にあるを以て、爰には石油の産地に就て何も記さざるべし。

余は先づ巡回線路を略述して本文に入らん。

三十二年六月三日日本汽船にて横濱を發し、十九日シンガポールに着す、二十五日より二十七日迄、シンガポールよりジャバのバタビア迄舟行、七月三日より八日迄、バタビアよりサマラン等を経てジャバの本部なるスラバヤ迄巡見、

九日よりジャバ島を去り舟にてボルネオに向ひ十五日同島のサマリنداに着す、

十六日より二十九日迄、サマリندا地方の石油地等に在り、

二十九日舟にてジャバ島へ歸行の途に上り八月八日スラバヤに着す、

九日より十二日迄プロモ火山の視察、

十四日より二十七日迄ジャバ島石油地巡見を爲しバタビアに歸着す、

三十一日シンガポールに歸る、

九月一日より五日迄、シンガポールよりスマトラ島北部メダン市に近き石油地に赴く、

六日より十一日迄石油地を視察す、

十二日よりスマトラの石油地方を去り、歸朝の途に就き十月八日東京に歸る、

#### 第一 出發前の感じ、及びシンガポールに到る前

余は格別の旅行家に非ずして身體虛弱なるを以て、出發に臨んで臆病の謗を顧みず醫科大學の病院にて診察を受け、其衛生學教室に於て『熱帯衛生』の書を借覽し、陸軍醫務局に行きて小池局長を訪ひ、又近藤虎五郎氏のジャバ土木事業視察の報告を讀み、三好學氏のジャバ大植物園の記事を披きて種々



のことを穿鑿せしも一概に笑ふべきことと爲さるるなり、特に……スタン  
フォードの地理全書ジーバースの地理書等の如きは第一に熟讀せし物にし  
て各書に記す所を見るに熱帯には毒蛇、猛獸、熱病、土人等の恐るべき事少  
からざるは兼て余が聞きし所と異らず。

又余に向て獨行を止め、僕を従へる事を勸むる人あり、ピストルと短刀を携  
帶せよと云ふ人あり、或は『七八月の大暑は熱帯地方一層烈しからん』と云ふ  
人あり然れども此等の言は余が旅行せし地方に適せず、ボルネオ其他の石油  
地は大抵事業に着手せる物を見るの目的なれば單身獨行も危難なく、又萬一  
雲霞の如き蠻群に襲はるゝ事あらば何ぞ豆の如き鐵砲玉を放て功を奏せんや、  
翫器の如き懷劍を振ふは芝居の御殿女中の最後を學ぶに過ぎざるなり、斯の  
如き滑稽劇に關しては石井八萬次郎氏の『臺灣礦物調査の報告』に於ける上  
匪に對する覺悟頗妙なり、曰く、若し出會ふ時は逃るのみ遁げて及ばざれば

死あるのみ。

次に『七八月の熱帯』云々は地理書を讀まぬ人の空想にして熱帯には一年に春  
夏秋冬の區別無くして兩期乾期の二季有るを知らぬとは哀しき事と云ふべし。  
又、熱帯には有名なる悪性のマラリアに就て、専門家に豫防法を求めしに、  
蚊はマラリア毒の運搬者なるを以て『蚊に喰はれぬ注意肝要なり』とは余が  
最も窮したる事にして殆爲しがたき事と思ひたり、又キニーンの常用は眞に  
マラリアに犯されし時、同藥の効少きに至る恐れありと聞けば先づ普通の衛  
生法を守るの外マラリアの豫防法無きが如し、固よりマラリアを運ぶ蚊も一  
一防ぎ難きのみならず突然として現はるゝ蛇鰐の類も又之を防ぐ法の少きを  
感ぜり、故に唯尋常の注意を以て身を護るべきのみ。  
熱帯の初旅は余固より恐無き能はずと雖も、一たびは熱帯に汗を絞るも面白  
しと思ひ、特にジャバの道路の完全なると其大都に於る種々の設備の盛なる

を聞き、且つ『東方の花園』と異名ある同島の種々の遊覽記は旅行者を同地に招く事頗急なるを見て、余も速に行かんとする心を生じたり、但しボル子オとスマトラの二島は斯の如き美名なしと雖も博物學者の旅行記を讀めば奇觀少からず。

即ち少々の備藥、普通の行李と白衣等の熱帶用品、其他の雜品を携へて半開半蠻のオランダ領インドに赴きしに、西洋人の奮發、日本人の賤業、支那人の勢力、土人の卑屈等は毎日の觀察に因て心に感じたり。

六月三日横濱を出帆し、十九日シンガポールに着する迄は、讚岐丸（此の時神戸、ホンコンを経てシンガポールに航す）の美しき食堂と甲板にて、大抵食と話と眠とを以て樂しき日を費し、或時某君の所有せる『啞の旅行』と云ふ良書を一讀して大に感じ、即ち東インドに必要なマライ語とオランダ語の獨學書を勉強せしが、船南進するに従て暑氣加はり、身體の働き鈍くなりて

格別の功を奏せず、然れども風波常に穩かにして風當り善き場所は甚涼しました同船の海軍士官某君海圖に因て航海線路に注意せらるゝに當り、余もまた之を傍觀するの俸を得て、海中の島、燈臺、岬等の位置の説明を受けまた船中に掲示せる海水の溫度其他の報告を比較して面白く有益に感じたり、船ホンコンに着せし時、同君等と上陸してガウフ時計店に於て東インドの海圖を求めたり、其價頗高しと雖も此地を過ぎた後には當港に於て東インドの案内記等を尋ねしにケリー、ウォルシュ商店等にも之を得ずして、其代りにホンコン案内記の版古き者有りしが余等の望む所に非ず、同所の植物園も公園としては美なれども格別多くの種類を代表せず、（九月に一覽せし同所の博物館は小にして且つ物品の陳列感服しがたく、之に接したる圖書室は余未だ之を見ず、蓋し東インドへの航海もホンコンよりする者は不定期にして、東インドの參考書はホンコンにては得がたしと知るべし。

ホンコンに於てすら尙ほ然り神戸滞在中諸氏に會てボル子オ石油の事を話せしにボル子オの實情頗不明にして、此石油に關係あるサミユール商會にても格別に委しき談話を聞かざりしは商業上の秘密に非ずして恐らくは能く知らざりしに因るならん。

余は大森知事の厚意を以て商會に赴きボル子オ石油地へ紹介を得しも其石油地の所在等詳ならずして、シンガポールに着船して三井物産會社支店に至りて之を質すまでは目的地の不明なりし爲め常に心中奇妙なる感じを爲せり、またスマトラ島ランカットの石油地への紹介をも神戸にて得たるが其紹介の効力は疑無きに非ず且つジャバ島の石油地も多くは參觀謝絶を主張するが如き風評ありし故、余が東インド出張は無結果に終らんかと憂へたり。

參觀謝絶は支那戦争の後に於ける西洋人の猜忌心に因る者にして西洋人が日本人の實力を買ひ被ふりて萬事を秘せんとするは實に我等の大不幸

なり、東インドのオランダ人が其製造所等を人に示す事を拒むは兼て聞く所なりしが戦争後一層烈しくなりし者ならん。

神戸と、ホンコンとの碇泊中も先づ斯の如く特別の面白味を感じずして日を費し、唯シンガポール到着の日を待ちしのみ、神戸を出て、後は直に紀淡海峡より外海に出て、柔弱なる余が身體は船の動搖を好まず、また船より眺むる景色には常に格別の美を見ず、特に日本の陸を去りて後は一層面白味なく船進むに従て海水のみを眺むる日多く、遂にシンガポールに近きて陸地多く見ゆるも殺風景なる熱帯林の綠叢海水に密接（否、海水中に生へたる森も少からず）するを見れば如何なる風流の詩人にも詩などを作る題には非ずと思はれたり。

## 第二 シンガポールの旅店

六月十九日午頃シンガポールに着船し、讚岐丸の事務長弘内氏と上陸すれば

色黒き土人争ひ集りて余が手荷物を運びて過馬車に持ち運ぶ、其喧しき事喧嘩の始まりしが如く、運賃を與ふべき男と無關係人とを分つ事難し、先づ此雜沓を終りて馬車は西洋旅店なるホテル、ユーロープに到り、例の馬車の男が賃錢請求の煩は之を旅店の者に譲りて一室（食事共一日金五圓程）に投宿す、日本の八疊の小座敷に起臥したる身は今熱帯に通じたる大家屋の入室に在りて、茫然として長椅子に仰臥し汗を拭ひて内外を眺むれば一として故郷を想ひ出すべき者更に無く、目に觸るゝ草木も殆皆名を知らぬ者にして異様の服を着けたる土人には猛悪なる黒色の顔に笑を含みて鬼の如き者もあり、五百羅漢の如き有り。

我室の廣き事は驚く計りにして裝飾殆無きも、天井高く、壁厚く兩側に「椽ガワ」ありて一方の椽は幅六尺位あり、入口は雙方の椽ガワにありて窓も廣く、戸は總て「鎧戸」と名くる構造を用ひ、或時は風を通すべく或時は全く

風を遮るべき者とす、然して硝子戸を用ふる事少きは土地常に暖なるが故なるべし。

隣室の西洋人は裸足に上は靴を穿ちて、赤色の縞を染めたる腰捲きを用ひ、上部はシヤツ一枚にて悠々として室の前に立てり、此風は西洋にては見るべからざる亂装と云ふべく、また本邦に在ては肥前天草邊の賤婦の衣服には許すべきも、東京にては頗る不作法と擯斥すべし、然れども東インド諸島にては土人の常装にして、西洋人もまた自宅及び旅店の自室に在ては此風を爲す事多し。

次に我寢床を見れば七尺七方程ありて、其上に眞の枕の外に長さ四尺計りの括り枕の如き物あれども實は枕に非ずして、此寢臺は全く一人用の者に相違無く熱帯に適する爲め特別に廣く作りたる者ならん。室内には顔洗ひ臺ありて、之に屬する水の暖きは此地の空氣一年中常に七十

度乃至九十度位の温度あるが故にして、如何ともすべからず、臺上の漱き水は一種のサヤキの徳利に入れたれば常に浸み出して外部濡ひ其外部よりの蒸發に因て割合に冷却する傾きあり。

室内の天井には可愛らしき守宮這ひ廻りて、初來の人は之に驚けども左程悪むべき者に非ず、却て蚊を喰ふの習慣ありて有益なり、(日暮るれば此者は盛に巡回して友を呼ぶ聲チチャク／＼と響き、時には寢臺の蚊帳の中に潜み或は戸棚の衣服の中に在り)。

室の前の庭には熱帯固有の椰子の木は「羽根バタキ」を倒立せるが如く幹高く立ちて風致無く、名を知らざる草木には枝茂りて青く、美花極めて稀なり、花を眺むるは熱帯の名物に非ずして葉を賞せんとすれば萬綠叢中紅一點も見當らざる所頗多し、但し花全く見へざるに非ざれども綠葉の多きに對すれば殆目に附かざるなり。

此無風流なる景色は忽ちにして余を厭かしめ、即ち午睡の夢を結ぶ、覺むれば則ち汗は瀧の如し、兼て讀みたる坪井氏の衛生綱領に因て熱帯に必用なる水浴を試みんとして浴室を尋ねれば、室の後方に於て長屋の如くに一列を爲し多くの浴室を設けたり、番人の支那人手眞似を爲して「貴君の室に屬する浴室は此處なり」と示せども余が嘗て遼東にて用ひたる支那語は此等の支那人に通ずる物に非るは遺憾なり、シンガポール並に東インドの通人たらんと欲せばマライ語を學ぶを以て最上とす、マライ語は此等の地方に於る通語にて爰に住する種々の人(西洋人、支那人、アラビヤ人、日本人、イギリス領インドの土人、東インドの土人等)に接するにはマライ語を用ひて可なり。即ち水浴室に入れば一隅には大瓶ありて之に小桶を附せり、余は其様子を知らざれば此瓶中に入りて桶を用ひざりしは大なる誤にして、實は彼瓶の傍に居りて桶にて水を浴びる仕掛けなり。

弛みたる五體は退屈などの憂なく、自然に時移りて日陰廣くなりたれば目的も無き散歩を試み、汗に濡れたる衣服は夕立ちを浴びたるが如くなれり、即ち衣服を更めて七時頃に食堂に入る。

食堂は天井高く、壁厚く、庇廣くして、煽風器にて風を起し居るが故に熱きソツブを飲むも割合に汗出でず、氷は供給無代なれどもビール其他の酒は高價なり、給仕人は客室のボーイと同じく皆支那人にして一定の服裝を爲し、之を給仕人頭たる「クリング人種」(色褐黒にして眼光尖く、鼻高き人)に比すれば雲泥の差ありて日本人の眼には柔和に美しく見え、特に「氷運び」専門の少年は可愛らしく見受けたり。

熱帯は食慾進まぬ者と思ひしに夕食は無事に規則通り終りて、我室に返り、上衣を去りて、薄フランチルのシャツに支那形の薄き着物を引き掛け長椅子に大の字を形くり、或は起き上りて短き手紙を草し、夜の九時過て眠に就く

寢床に入れば頗る暖かく、室の戸も諸氏の注意を守りて成るべく密閉したれば、兩國橋の涼みとは正反體になれり、兼て衛生學の書にて見たる如く熱帯には時として酷熱の爲め寢付き悪るしと有りしが、余は熱帯旅行の初日より、寢付き悪しき事一度もなし、唯耳を欬て聞けばチチャック／＼と叫ぶ守宮の連中は蚊を尋ねて天井と壁を這ひ廻り、又蚊帳の上を眺むれば可愛らしき守宮の一二匹散歩するを見たれども、余は何の心配もなく眠に就けり、余若し京都あたりの「都びと」なりし時は夜中に鶴の夢を見しならん。

明くれば翌朝となり、兼て人に教へられし如く、太陽よりも早く起き出で、朝の涼味を求めんとせしに風無くして樹の枝は全く動かず、唯見る近室の人、大抵早や起きにしてボーイの茶器を運ぶに忙しきを、曙光の間の短さは熱帯の名物にして忽ちにして椽先きは日輪赫々として輝き余は長椅子に倒れて雑書を讀む(稍涼しと思ひしは夜明前の事にして余は厚き毛布を掛けて安臥せ

り、日出れば常に暖く、夕刻と雖も格別の涼味なし、當地の寒暖計は大抵七十度乃至九十度を示し、一年中常に夏なり。朝の食事を終りて三井物産會社並に日本領事館等を尋ね、諸氏の厚遇を受けて余が巡檢の前途を豫想せしに存外に容易なるが如く爰に一先づ安心す。之より訪問、博物館見物（圖書室あり）、買ひ物等にて數日を費し（植物園は後に一見せり）シンガポール全體に天然に生じたる活動の「人種展覽場」に眼を馴らさんとせしも容易には成就せず、或時色の濃褐にして鼻秀で、眼鏡くして、唇締りたる一少年（イギリス領インドのヒンズー人）我室に來り、洗濯屋と名乗りて注文を求めしが、其色を塗り替へて白粉を施せば天晴れの美少年なるも色の黒褐なるが故に人相唯恐ろしく、渡さは奪ひ去られんと思ひしも試験の爲め二三品を與へたり、然るに翌日は既に白々と洗ひ清めて持ち來り、奇妙なる恐ろしき顔に愛嬌の笑を帯びて去る。

「嗚呼斯の如くにして焉んぞ能く色黒の人種の中を旅行するを得んや、色黒を見馴れては日本人は黃疸の如く見へて奇なり」と奮發せしも、歸途に神戸に着せし時は矢張り日本人の顔色は柔和にして美しく思ひたり（旅宿の生活も日々に慣れて六時前の朝起きを爲し（赤道地方は大抵常に六時より六時までを晝間とす即ち一年中短日長日の區別殆無し、夫れより七時は朝のコーヒー、八時半に朝食、一時に晝食、四時頃に茶、七時に夕食ありて、總て充分なる食慾を以て無事に濟ませ、毎日一二回の冷水浴も慣れては心地善く感ずるに至れり。要するに日本人の身體にはシンガポールの西洋風の生活は堪へ難き者に非ず。

### 第三 シンガポールよりバタビアに赴く船中

六月二十五日夕の八時頃シンガポールの波止場にてオランダ船に乗り込めば

船中の光景は一種特別なり、食堂並に寢室の窓の大なるは驚く計りにして風通り善き代りに煽風器の用意なく、浴室には天井より植木屋の如露の如き仕掛にて水を注ぐ者あり、雪隠には水を入れたる徳利十本計りと清潔なる手拭あり（此徳利と手拭の用法は迎も衆中にて公言し難し）、又食堂の壁には瀬戸物製の景色畫にて作りたる飾りあり、甲板には長枕を附したる椅子ありて且つ大なる椅子甚多し、然して特に珍らしく見へたるは船中のボーイなり。色は日本人の日に焼けたる者の如く、鼻は低くして据はり善く、唇も厚き方、眼の様子、頭髮の色などは日本人の様に、足は跣にて何も穿かず、頭は風呂敷の如き者にて包み其端を二つ細長くして後方に垂れたるは實に異様なり、又衣服は赤布にて飾りたる白布の洋服にして一見特別の人物と思はれたり、是れ即ちジャバ人のボーイにして色暗褐にして雪白色の皿を持ち運ぶ時は一層色黒く見ゆれども、跣にて、駈け廻る故足音静なるは愛すべく、又舉

動頗丁寧にして且つ柔順にて敏活なり。

お客大聲にてボーイと呼べば遠方よりワーンと答ふ、此ワーンは「旦那様」の意にて Tuan の聞き違ひなりと余も發明せり、此ボーイは日本人の目には決して美しく見へざれども一たびシンガポールを出で、東行せばオランダ領インドの沙船と旅店には大抵此類のボーイにて詰め切りなり、又彼等は土人なるが故に、オランダ政府の政略に因て横文字を用ふる事を禁ぜられ、お客に向てヨーロッパ語を語る事を得ず、客も又之に對すればマライ語を以て用事を命ぜざるべからず、故にシンガポール又はピナン並にジャバ島其他に在留する人は、此等地方の通語なるマライ語を解せざる者少し、此汽船を有する汽船會社の出版に係る東インド案内記を人より借りて船中にて一讀せしに熱帯旅行の生活の風など記しありて面白く、特に汽船旅行中の風變りは爰に寫し置く値あり。



先づ夜明けに近づけば大抵の旅客は朝の涼味を樂まんと甲板の上に出て薄布製の西洋寢衣又はジャバ土人風の薄衣にて跣に上は靴を穿ちて徘徊する風をなし、夜中、早朝（朝食前）並に午食後の「午睡時」にはオランダ船の甲板の上にて平氣に此裝束を利用するなり、（但しジャバに通ふフランス船等にては此流義を行ひ難し）。

朝のコーヒーを甲板にて終り、其より冷水浴を行ひ（温水浴は東インドのオランダ船にては見へず）て後ち朝食の爲め衣服を改む。

朝食は普通の西洋料理にして特にバターパン（パンにバターを塗りて其上に種々の物を思ひ思ひに取りて載せ食ふ）の類多しと雖も晝食（十二時頃）は有名なるライスカレーなり。

ライスカレーは日本にては西洋料理と心得居れども實は東洋料理にしてオランダ人が東インド地方にて用ふる晝食なり、また此東インドのライ

スカレーは米の量多くまた汁も一種類以上ありて、飯上に積み上る雜品も其種類頗多し、即ちボーイは先づ飯を運び來る故之を深き皿に取り、次に持ち來る一二種の汁を此上に注ぎ、之より陸續として運び來る焼き牛、焼きエビ、焼き魚、キウリモミ、其他合せて拾種乃至三拾種位の雜物を少々づゝ取りて彼飯の上に置きて食ふを常とす。

然れども是等の雜品には往々初來の人の判斷し難き者ありて、ソーセージと思ひてバナ、の糞附けに出會ひ、善ささうに見へたる魚肉を取て小骨の處置に困難する事珍しからず、又大抵の品にはトীগーガラの含有ありて屢口に入れて涙を垂るゝ事あり。

此ライスカレーを食ひて後は一二の焼き肉等を取り又果物を味ひて晝食終る。

晝食終れば大抵の客は西洋寢衣又は土人服を着して甲板にて午睡を行

ひ、午後の茶にボーイの駆け廻るを待つ、然れば船員も亦此等の暑装を爲して、所々に午睡を爲す者多し、實に此午睡は東インドのオランダ人の常務の一と看なすべし。

午後の茶を終れば復た冷水浴を行ひ日暮るれば眞の西洋服を着して夕食と雖も黒衣を着するの必要少き様なり。

食後は復甲板に出で、遊び、多く列びたる安樂椅子と長枕を附屬したる椅子にて快く懶眠を貪るべし、斯の如く甲板に眠りて夜を過すとも、濕地の沿岸等に非れば大抵マラリアに犯されずと聞けり、又船中には氷にて冷したる清水と、冷したる酒類は常に備へありて、傾くる一杯にて暫く熱帯の暑氣を忘るべし。

以上はオランダ船の上等船客の日課にして船の進行中は風當り善ろしくして愉快なり。

尙ほ甲板の前部に赴けば下等客の雑沓は一見の價あり、爰には太平洋の熱帯地方に住める種々の人種が入り交りて大抵鶯色なる男女が極彩色に染めたるシャツと腰巻き（日本のお嬢さんの腰巻に似て一層模様複雑なり）に身を飾るあり、また全く裸體の小兒あり、五本の指のみを用ひて飯を食ふ人もあり、異様の食物を味ふ、豚尾あり、桶形帽子のアラビア人あれば風呂敷にて頭を包むジャバ人あり、實に書物にて研究せし机上の人種學者は此亂雑の人の群に目を眩して茫然たるべし、特に立錐の地無きまでに群集せる此人の山、人の海に在て毫も汗を流す者を見ざるは皆熱帯の住民流石に慣れた者と思ひたり。

船中の所見は種々面白きも航海中に見へるスマトラの島バンカ島の如きは景色の味少しも無し、唯植物の繁茂せること熱帯風なるを見て驚くのみ。

船中の同行者にはドイツ人、イギリス人等も有りて時々會話せしも格別の珍

ひ、午後の茶にボーイの駆け廻るを待つ、然れば船員も亦此等の暑装を爲して、所々に午睡を爲す者多し、實に此午睡は東インドのオランダ人の常務の一と看なすべし。

午後の茶を終れば復た冷水浴を行ひ日暮るれば眞の西洋服を着して夕食と雖も黒衣を着するの必要少き様なり。

食後は復甲板に出で、遊び、多く列びたる安樂椅子と長枕を附屬したる椅子にて快く懶眠を貪るべし、斯の如く甲板に眠りて夜を過すとも、濕地の沿岸等に非れば大抵マリアに犯されずと聞けり、又船中には氷にて冷したる清水と、冷したる酒類は常に備へありて、傾くる一杯にて暫く熱帯の暑氣を忘るべし。

以上はオランダ船の上等船客の日課にして船の進行中は風當り善ろしくして愉快なり。

尙ほ甲板の前部に赴けば下等客の雑沓は一見の價あり、爰には太平洋の熱帯地方に住める種々の人種が入り交りて大抵鶯色なる男女が極彩色に染めたるシャツと腰巻き（日本のお嬢さんの腰巻に似て一層模様複雑なり）に身を飾るあり、また全く裸體の小兒あり、五本の指のみを用ひて飯を食ふ人もあり、異様の食物を味ふ、豚尾あり、桶形帽子のアラビア人あれば風呂敷にて頭を包むジャバ人あり、實に書物にて研究せし机上の人種學者は此亂雜の人の群に目を眩して茫然たるべし、特に立錐の地無きまでに群集せる此人の山、人の海に在て毫も汗を流す者を見ざるは皆熱帯の住民流石に慣れた者と思ひたり。

船中の所見は種々面白きも航海中に見へるスマトラの島バンカ島の如きは景色の味少しも無し、唯植物の繁茂せること熱帯風なるを見て驚くのみ。

船中の同行者にはドイツ人、イギリス人等も有りて時々會話せしも格別の珍

談なし、食事の時余と隣坐せし乗組の一人（オランダ人）余に向て曰く、日本は既にオランダと對等の條約を爲せし故、出稼ぎの日本婦人は、宜しくオランダ領インド諸島より本國へ呼び戻すべし、然らざれば國辱ならん、

と余は呆れて答ふる能はず、實につまりらぬ事を言ふ人と驚きたり。

#### 第四 バタビアへ到着

二十七日の午後本船はバタビア市に近き港（之をバタビアと稱する事あれども實名はタンジョンブリオック）に着す、余はホテル、ピッセ（バタビアの南なるウエルテフレデンに在り）と稱する旅店の出迎ひ男ジャバ人と共に汽車の停車場に至り、切符を買はんとせしに役人は皆純粹のオランダ人と合ひの子のオランダ人にして教育少き男なるが故外國語は格別上手にあらず、またホテルの出迎ひ男はジャバ人なるが故にヨーロッパ語を用ゆる權利な

し、余は前以て少々のおランダ語とマライ語を暗記せしが尙ほ新語通用に限りありて少しく心細き位地に在りながら、出迎ひ男に導かれて客車に入り、ウエルテフレデンに赴く。

車窓の大なる事は風通しを善く爲すが爲にして、停車場にヨーロッパ人と人の便所を分ちたるはヨーロッパ人の權利を重んずるが爲めなり、色黒き人が洋服着て跣なるは眞の西洋人に非ずして土人なり、土人は頭上より足の先きまで眞の洋装を爲すの權無く、帽子を破るを見るも毛の上に直に帽を用ふる者無く、必ず布にて頭を包みたる上に着帽するの規則なり。

汽車の賣り物には種々の果實あり、砂糖キビの輪切り、芭蕉の葉に包みたる米飯、焼き鳥、焼きエビ等種々の珍品一々名狀すべからず、之を賣り歩く者は大抵皆ジャバの土人にして、粗末なる薄布のシャツと布製の腰巻きせる男女（多くは婦人）にて色鳶の如く、鼻低く、唇に屢ば赤色あり（或植物の葉

ど實を嚙む習慣あるを以て血の如き唇色を呈する者あり)て一見不快の感じあれども物の言ひ方柔かにして舉動靜に且つ潔癖あるが如し、汽車に上り下りに荷物を運ぶ男も亦ジャバの土人にして初來の人は一見其人相とシャツ腰卷きの姿に一向區別の點無く、僅に腕に附けたる番號の革の輪にて辨別するのみ、因て往々人を誤て別人に我荷を運びたる賃を與ふる事あり。車窓より外を眺むれば耕作の進みたる事驚く計りにして、熱帶の自然の原林(斧を入れざる林)は此地方の線路にて見るべからず、却てバナ、の林コ、ヤシの森、水田、菜園等の豊なる有様は貧を知らざる「極樂園」は此地に有りと驕るが如し又土地は一年常に夏なれば土人の小兒は殆衣服の必用なく、身體は赤土の如き色にて赤色の土上を駈け歩く風情は一寸面白し、土人の家は竹を編みたる壁とカヤ葺きの屋根のみ目に立ちて唯「キリギリス籠」の改良を見るが如し、野に働く男は腰卷きのみを着けて體の上部裸なる人多く、シャツを着る

者少なし或は薄布にて造りたる股引きのみを用ふるあり、然れども婦人は常に腰卷きを着けて乳の部までを掩ひ、唯腕と肩をば露はす者あり、或は薄きシャツを用ふ、其小兒を負ふには日本流に背上に負ふ事無く必ず少しく一方に寄せて丁度片側の腰の骨に跨らす様に爲すは奇習なり。此等の奇觀を眺むる間に汽車は早くもバタビアの古市に着す、余即ち宿屋の男と共に車を出て、一種の馬車(サドーと名く)に乗す。

此車はジャバ其他にて見る者にして馭者は前に向ひ乗客は後方に向て背中合せに乗る者なり、乗客大抵二人位なれど馭者と列座する人あらば、合計三人を入るべし。

馬車は古き市街の支那人町を通行し次第に西洋人の住處に入れば、狭くして不潔なる支那家屋は見へずなりて廣くして清潔に(但しシンガポールの如き大家屋無し)且つ庭園を有したる別荘體の西洋家屋(賣物店と雖も多少別荘

體なり) 多き處と代りたり、是れ即ちウエルテフレーデンの市街とす、余は此處にて第二三等の旅店なるホテルビツセルに入りしに(食事付き一晝夜四五圓) 家屋の構造はシンガポールの旅店と大差なしと雖も一體オランダの熱帶風にして晝食にライスカレー多く出る事、ボーイのジャバ人なる事、其他浴室、雪隠等の特性は先きのオランダ汽船に善く似たり、唯船中と異りて陸上の家なれば規模廣大にして室の前の空地に糸を張りて洗濯物を乾かすお客あり、土人の腰巻、薄シヤツの畧装にて朝と晝の食堂に坐する多数の貴婦人あり、一見無禮講の如くなれ共、其淡泊なる事は愛すべし、特に此畧装にて馬車に乗り買物等に出掛ける貴婦人も夕食には必ず眞の西洋服を着して食堂に現はるゝは面白し。

止宿中の客人には宿屋のボーイの外に我下男を有する人ありて、之に洗濯物を命じ又種々の雑役をなさしむるは東インド旅行の奇習なり。

此家に投ずる前に既に汽船と汽車に掲示せるを見し如く、東インドに來りたる外國人は到着次第三日以内に官廳へ自身出頭して滞在許可を得ざる可らず余も亦已を得ず市廳に赴きて見しに入口には牛肉屋の庖刀に似たる刀を抜て突つ立ちたる青服の跣足の男あり、即ち土人を利用して門衛と爲したる者なるべく、恐ろしく見へて且つ多少の可笑しみあり、余は可笑しさを忍びて、名刺を通じ、一の官人に面會し種々の書類を示す、役人余を見て先づ問ふに「ドイツ人なるや」を以てす、蓋し東インドの如き人種混合して千態萬狀の合ひの子を有する地方にはドイツ人、オランダ人などと稱すれども實は土人の妾に生まれたる雜種が多数を占むるを以て人種學者と雖人種の鑑定は困難なり、故に白人を父とせざる土人には禁制なる所の眞の西洋服装の人を見る時は日本人とヨーロッパ人とを誤るは不思議に非ず。

余は相當の税を拂ひて免許狀を得たれば先づジャバ島の數ヶ所に滞在の差支

なき事と成れり、然れども尙ほ所々巡回せんには更に旅行免許を得ざるべからず、更に之を得たる後ボルネオに赴きしに爰には改めて蠻地巡回の免状（アラビヤとオランダの對譯文）を得たり、初來の人此煩雜を感ずる事決して愉快に非るなり。

余はウエルテフレードン滞在中に博物館に於ける人種學上并に古物學上の標品、鑛山局に於ける石の標品並にボンテンゾルグの大なる植物園等を見たりども此等の記事は爰に省く。（三好氏の著書并に地質學雜誌第七十四號等見よ）

當地にては種々の旅行準備を爲し、又種々の物を觀察せしが、先づ第一に感ぜしは「日本人の住所」を人に問へば西洋人は大抵笑ひながらに答ふるなり、ジャバ全島にて日本人と言ふは大抵皆出稼婦人なればなり。

次に市街道路の完全、西洋人のクラブの大なる事、西洋人の庭園の美は到底薄資なる日本人の及ぶ所に非ずと感心し市中を走る蒸汽船に「壹等」「貳等」並

に「土人」の三級を記したるは土人を級外とせし考案面白くオランダ人が屢「土人の手前」と言ふ語を發するは自重心を有するの徴にして羨まし、顧るに我臺灣の支那人を級外に取扱ひて自から支那人の手前に耻ぢて注意する事多きや否や。

余の如き萬事に感動し易き者は初めて見たる土地には雜感交至る、或時土地の新聞記者面會の爲め來りしが、余即ち話しの序に、此邊には凡そ壹萬人計りの西洋人あるのみと聞くに西洋人の新聞紙四五種あるは奇なり合併して協力せば大紙とならんと言ひしに、先方は一寸閉口し其後に「日本人は陸海軍強けれども國は軍費にて疲弊すべし」と言はれ此度は此方にて閉口す、同氏は次第に新聞探訪者の如き氣質を顯はし日本に關する質問を發したれども、「夫れ等は斯くくの書物にて見給へ」と教へ、翌日其社を訪問する事となし、約の如く之を尋ねしに、小新聞とは言ひながら實に小數の社員にて事務を取

り編輯をなし居る事の活潑なるには驚きたり。

余は旅行の準備としてバタバアに於て圖書を買ひ求め、又寫眞販賣店の様子海圖地圖賣下げ所等の事を確めたれども、紀念用並に學術用の買入れ品は多く之を後に譲りたり、又バタバアの全市に遊樂所の少きに驚きて之を人に尋ねしに小さ芝居あり、數ヶ所のコーヒー店の如き者あり、又クラブ等に時々催ほさるゝ音樂あり、加ふるに舊時の動物園跡に設けたる種々の見せ物は時時開場して余が一度爰に行きて最も不思議に思ひしはジャバ人のワヤンと稱する「芝居踊り」(芝居掛かりの能樂)にて、土人の舊王族の邸内にて催ほさるゝ時は壯觀なりと聞きしが先づ始めの間奇にして以後は全く欠伸の種なり、又同所には大なる飲食店と舞踏所もあり、此處にカフェー、シヤンタンと云ふ所あり、其名稱を聞けば實にフランスの鄙風を思ひ出す様なれども、全く無事なる者の如く、輕業、自轉車乗り、小芝居の様なる事などを見せる場所にして、爰

にてコーヒーを飲むに非ず、若き踊り女、唄の女の跳ね廻るにも非ず、流石に當地にて屈指の見世物場なるが故に人の群集も甚しく、其代りに面白みも格別に非ず余は程善く通觀して歸る。

#### 第五 ウエルテフレーデンよりサマランに至る

七月三日早朝汽車にて出發せんが爲め、未明より起き出で、荷物を整理し、旅店の馬車に乗りて停車場に至り、無事に乗車す、前六時頃出發し、十時頃より景色有名なる地方に至るも綠樹繁茂して岩石の突出する者少く鐵路は高き山地を過ぎて割合に涼しく感ずるも格別の快味無く、又谷の深く切り込みて嶮なる状態を見る能はず然れども殆ど至る處に水田並にコーヒー園、蔬菜園等あるは驚くべき事なり。

午頃に至れば午前に車掌に話し置きたる辨當は一の停車場より車中に運び來りたり、之を見るに瀬戸物製の器にして四つ重ねの蓋物の如く作りありてビ



ステキ焼きたるヂヤガイモ、キウリ、バナ、等を入れる、又之にコツブと小刀と肉刺し附屬して此等の物全體を一度に木製のワクに入れて提げ得る様に造りたり、食し終れば先きに運び來りたる男代價と酒手と空器とを受取りて去り、恐らく次の停車場にて下車し去るが如し。

晝食に傾けたる麥酒に睡氣を催して忽ち眠る間に線路の屈曲に遇ひて、汽車は方向を變じ寢顔に焼き附く熱帶の太陽に夢を破られ、再び窓外の觀察を始むれば日本の富士山に似たる山は午前も午後も所々に見へて奇觀あり。

マオスに近くに及んで拾數里以上の間に恐るべき繁茂の深林ありて、見上げる程の大樹に蔓の纏ひたる者あり、枝より蔓の如き者を垂れて地に達する者あり、一本の樹に數種の植物寄生したる者あり、實に「亂雜」の定議は「熱帶深林の如き者」と云て可なり、日暮る、頃沼の上に螢の飛び行くを見る、此夜マオスに一泊す、ジャバの汽車は夜行せざるが故なり。

翌朝（七月四日）午前五時過ぎにマオスの停車場より再び汽車に乗りサマランに向ふ。

此途上火山の多く見ゆる事耕作善く進みたる大原野等の状態等は昨日見たる者と異らず、オランダ政府が鐵道を敷きたる大工事の困難實に察するに餘りあり、道路の完全なる事、土人の家並に田圃の規則立ちたる取締り等も汽車旅行にて既に充分に目に附く程なるはオランダ人が土人統御の術に富める者か土人が特別に柔順なるか、此兩方の天性俱に存するが故なるべし、然れども何よりも大切なる資金有らずんば決して是に至らざるべく、特別の忍耐力有らずんば何んぞ能く西洋より此熱國に來りて交通、製造、其他の大經營を爲す事を得んや、然るに我國は元來東洋の一貧國にして國に遊食の輩多く、有爲の人の活力は空しく隱居と食客等の飼ひ料に失ふ處少しとせず、嗚呼哀しい哉。

此汽車中に坐して乗客の出入を眺むるもまた一興あり、日本流の傘を以て日を除けて歩く人あり、お公卿の行列に有る美麗の長柄傘に金紙の飾りなどせしを従者に持たせて行き、又絹布の衣を纏ひ黄金の飾りを用ひながら跣足にて往來する土人の貴族あり、小馬繫ぎ場の屋根低き様なる處に種々の雜品を列べて土人の群集喧噪するは村の市場なり、田舎の道の傍に水茶屋の如き者を出し客を待つ女が顔に白粉を施したる如きは一寸したる病氣にて土人流の藥劑を顔に塗りし者にして其様子は濫板の塀に初雪を見るが如し、大道の所々に道幅一杯の大家屋を建たるが如き者あるは熱地の用心として人馬の休息所あり、辻番の如き家（全く竹製の者あり）に奇妙に抉りたる木を吊りたるはポコン／＼／＼と打て時を報ずるの道具にて、又夜間に寝ず番の男が盜難火災等を急報するの用に供す、村の道路の家の前に小石を積みたるは毎家にて分擔する道路修繕に前以て用意したる材料なり、街道の並み木は廣

き道路の上に天然の縁門を作り村家に鬱生するヤシの木は四十本を以て一家の人の食物を常に供給するに足るの果實を生ずと云ふ。

ジャバの土人は凡そ三千萬人、オランダ人は僅五萬人に及ばず、衆寡善く敵して平和を保ち、土人は良政と、壓制の調合を受けて無事に太平を謳ふが如し、羨むべき事なるかな。

ジャバの政治は善く行き届きて舊來の土人の王は貴族として隱居の身と爲り、全く兵馬の實力なきも、中以上の土人が協差の如き者を（腰の横に非ずして）背後の帯に挿みて歩く者あるは一寸面白し、是れ格別の用を爲すに非ずして唯臆病武士の飾りならん。

又人種學上の研究、土人語の調査、古物古跡の探求、植物、動物、礦物、等の研究も本島には既に餘程進み居りてはバタビアの諸博物館並にボイテンゾルグの植物園は實に觀るべき者とす。

汽車サマランに近ければ有名なるチーク（材木を生ずる大樹）の森の廣大なるは善くジャバの大富源たるに耻ぢず、但し其樹木が葉を落す季節（八月頃）には熱帯の霜枯れとも稱すべき景色なり。

遂にサマラン市街に着せし時ジャバ第一の旅店ホテルバビヨンの迎ひの男と共に馬車に荷物を移して同店へ投宿す。

之より後サマランの西南なる石油試掘地に赴き、又サマランに於ける石油精製所を見て汽車に乗り八日スラバヤへ直行す。

サマランの市街にて見たる石油精製所等の記事等は皆爰に省くを以て商上局臨時報告（三十二年十二月）に就て見給ふべし。

#### 第六 スラバヤよりボル子オに渡る道中

サマランの視察を終りてスラバヤ（東ジャバの一市）に至り、七月九日同所を去りてボル子オに向ふ。

汽船はオランダ汽船にして先にバタビアまで乗りたる船の様子と格別の差なし、途上諸所に碇泊して十五日ボル子オ東岸のクテイ川を少し上りたるサマリンダに到着す。

ボル子オ南岸に於けるバンジエルマシンの一の寄港地にして余は爰にて一寸上陸し凡そ一晝夜を小き旅店にて費せり。

此地はボル子オ屈指の都會なれども格別面白き物なく、近地に猿の多き島ありと聞き支那の豪商なる洪氏の船を借て之を尋ねしが、格別多数の猿に會せずと雖も、此邊沿岸は一帶湿地にして樹木猥りに繁茂し眞に天然の奇觀なり、彼のバンジエルマシンの都會も元は廣大なる湿地なりしを埋め立てし者と云ふ、ジャバの到處耕作の進みたるに比すれば猿の島の近傍は天然の儘にて眞に野蠻の境界なり、旅店に歸る途中にて始めに通行せし土人部落を再び過ぐれば河の兩側に大なる筏を多く置きて此上に小屋を作りて賣店を設くる者あ

り、浴室を設けたるあり、又土人の小兒筏に立ちて相戯れ忽ちに汚濁の河水に飛び入るを見れば此地の土人は半分「水生動物」の如き觀ありと云ふべし、然れども岸上の家屋は其數少からず、又陸上の交通に必用なる橋は永く朽ちずして重く頗堅固なる良材を用ひ其橋杭は俗にアイヨンウードと稱する（鐵の如くに堅き意味なり）堅材にして日本人の羨むべき物とす、又橋の上に屋根を設けたる者あるは保存の爲めと涼しさを求むるの爲めなるべし、彼のバシエルマシンの「半水半陸」の土人村は奇觀少からざれども特に目立ちて大なるは婦人用の笠にして徑三尺位あり、之を被て船に乗りたるを背後より見れば殆笠のみ見へて人を見ず、又土人形の木舟は其前後に細長く反りて突出したる部分ありて三日月が水に浮ぶかと疑はる、此地にて有名なる鰐は村落の筏家多き處には全く來訪せざる者の如く見ゆれども其他の處には水浴者なきを以て見れば其害屢有りと思はる、又市街に散歩して兵營を過ぎる時は

白人の兵卒と土人の兵卒とに出會ひて其風采の比較面白し、本國より呼び寄せたる白人の兵卒一人の費用既に莫大の額なりと聞き、又土地に自生する土人の兵卒が頭を布にて包み足を跣にして整列する不思議の容子とを見ればオランダ政府が植民地防護上の苦心察すべきなり、次に注意すべきは當市第一の旅店に多くの動物を養ひ居りて中に一疋の狸々が庭園に放し飼ひと爲りて遊び歩くは可愛らし。

余は當市を去る前に洪氏（支那人）を訪問したるに其家の大にして美なると其倉庫の大なるには頗る驚きたり、蓋し支那人は東インドの一大勢力にして表面上は土人と同等の資格にて輕蔑せらるれども、種々の方法にて土人の富を吸収し又天然の「商智」を以て大なる富を重ねる事は皆人の知る所なり、之に對して日本人の在留者が白人と對等の條約に因て表面の地位高きも大抵は出稼婦人なるは哀むべき事なり、洪氏の子年二十四五歳なる者あり、余之